
リアナ ~ Holy Knight of the Grief ~

雁野文蔵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアナ ～ Holy Knight of the Grief

【Nコード】

N5147S

【作者名】

雁野文蔵

【あらすじ】

リアナは隣国アステルベルク皇国のイスマリア皇女を、母国ラングーナ王国までの護衛の任を命じられた。

それはリアナにとって幼少の頃から想い続けたカイン王子の下に嫁ぐ女性を自ら無事に送り届けなければならぬという辛い任務。

故に己の秘めた想いと聖騎士としての責務が彼女を苦悩させる。

そこへ妖魔と呼ばれる人ざらぬ者達が襲い掛かり、苦悩するリアナを追い詰めていく。

心身ともに疲弊していくリアナは、果たしてイスマリア皇女を無事に守り抜くことが出来るのか!?

そして、彼女が見出した答えとは?

イスマリア皇女を巡る攻防の果てに、物語は誰もが想像し難い結末を迎える。

追憶 〵 Recollection 〵 (プロローグ) (前書き)

過酷な運命の波に翻弄されながらも、出会いと別れを通じて成長していく少女の生き様を描いたシリーズ第1章。

主人公リアナの心情が揺れ動く様を主体に物語前半は進んでまいります。後半は異世界ファンタジーらしい展開を用意しています。どうか最後までお付き合いの程、何卒宜しくお願いいたします。

*読み易さに重点を置いている為、敢えてこのような形式にしています。

*この物語には多少なりとも残酷な描写があり、敢えて『R15指定』としています。

あらかじめご了承ください。

追憶 〱 Recollection 〱 (プロローグ)

名前が刻まれていない小さな墓標。

私はこの下に眠る故人に一輪の花を手向け、そつと静かに祈りを捧げる。

墓前で両膝をついて座り、生前の姿を思い描いて偲ぶ。

この小さな墓はランガーナ王国領内でもっとも高い山の頂上であり、ここまで訪れるには険しい山道を登りきらねばならない。

辿り着いても墓標の周囲には何も無い殺風景な場所であるが故に、私を除けば誰も訪れることはないだろう。

だが、国境に面するこの切り立った崖の上から眼下を見渡せば、安らかな眠りについたこの人の故郷であるアステルベルク皇国を一望することが出来る。

ここならば俗世のしがらみに縛られることもなく、母国の風を感じながら静かに眠れるだろう。

これが今の私に出来るせめてもの贖罪であり、また唯一の手向けでもあった。

「お久しぶりです。ここでずっとお独りにさせてすみません。今まで寂しくありませんでしたか？」

誰にも邪魔をされることなく故人との会話が続き、本来ならば聞こえる筈もない声がか確かに心の中へと染み込んでくる。

リアナ様、とうとうこの日が訪れたのですね。

陽炎のように墓標と重なって浮かび上がる微笑む姿と穏やかな口調で聞こえる声は、決して幻でなければ幻聴でもない。

長くしなやかな髪が似合うその美しき姫君は、目の前にまぎれもなく存在している。

僅かながらもあどけなさが残る優しい顔立ちは、生前のまま何一

つ変わっていない。

ここへ訪れば必ず会えると信じているからこそ言葉を交わし、温もりすら感じられる。

そう、彼女は永遠の時間とこの中で今も生きているのだから……。

「はい、ですからこうして貴女とお話をするのも、もしかすると今日が最後になるかもしれません。ですが、必ず生きて帰ってきます。私にはまだ、やらねばならない事が残されていますから。だから、もう一度聞かせて下さい……あの時と同じ言葉を……」

長く続いた妖魔達との戦い　その決着をつける前に、どうしてもこの人と会わねばならなかった。

己に課せられた宿命に打ち勝つには、この人が残してくれた言葉をもう一度この胸に刻み込んでおく必要があったからだ。

ただ、ここへ来る度にあの日のことを思い出してしまうのが、正直言っても今も辛い。

自分が如何に愚かであったかと、つくづく思い知らされる。

しかし彼女との出会いがあったからこそ、今日まで生き抜くことが出来たと思う。

この人に助けてもらったこの命を無駄にしない為にも、私は今から妖魔王ルキフェールとの戦いに挑まなければならない。

そして、必ず生きて帰ってこよう。

私だけの姫君が残してくれた想いと共に……。

リアナの想い ｝ e m o t i o n ｝

私はカイン王子直々の勅命を受け、隣国であるアステルベルク皇国へと向かっていた。

アステルベルク皇国は我が国のような強大な軍事力を持っていない。

自然との調和を標榜とし、争いとは無縁の緑豊かな小国だ。

そして我が母国ランガーナ王国とアステルベルク皇国は同じ祖とした兄弟国であり、ランガーナ王国の王位後継者はアステルベルク皇家から妃を向かえねば王位を継ぐことが出来ない。

そしてアステルベルク皇国もまた、次期皇王の妃をランガーナ王家の血筋を引く者から選ぶ掟がある。

故に互いの血を交わらせながら絶やさず、その血脈は延々と護られてきた。

両国が創世して約600年という古い歴史の中で、高貴なる血の交わりはかつて一度も違えたことがない。

今回、私が少数の兵を連れてアステルベルクに訪れたのは、我が主ともいうべきカイン王子の妃になられるイスマリア皇女を母国ランガーナまで無事にお連れする為の護衛を命じられたからである。

本来ならば名誉あることだ。

しかし、今の私にはこれほど辛い任務はない。

ふと昔の記憶が鮮明に蘇ってくる。

あの無邪気に戯れていた懐かしき日々を終焉が訪れた日のことを……。

* * *

稽古着とは思えぬ華やかな衣装を身に纏った少年が、目の前で息を切らしながら木刀を正眼に構えている。

利発そうに見えても顔立ちはまだ幼く、まだ10歳にも満たない私より背が少し高いぐらいで年齢も然程変わらない。

一見、ひ弱そうな美少年に見えても年齢に不釣り合いな気高い雰囲気
を漂わせ、闘志漲る意思を小さな双眸に宿している。

その少年が気高く美しいとまで表現してしまう容姿を形成しているのは、偏ひとへに金色をした髪が存分に惹きたてているからであろう。

「ハア、ハア……最後ぐらい一本取らなきゃ、格好が悪いよな。女の子に負けっぱなしだなんて、これじゃ恥ずかしくて城の外には出られないよ」

全身を汗まみれにして少年が愚痴を零しながらも楽しそうに頬を緩める。

そして両手で握り締めた木刀に力を込め、じりじりと間合いを詰めてきた。

私からは決して動かない。

肩の力を抜きながら彼と同じ高さに木刀を構え、相手の目の動きで次の一手を読みつつ待ち構える。

広い敷地を誇るランガーナ城内にあるこの場所には、互いに木刀を構えながら対峙する私達二人しかない。

鉄製であしらえた両開きの門以外は城壁で固められ、外部からの侵入を拒んでいる。

ここは庭園というには殺風景で修練場という言葉が相応しいだろう。

「でいああああっ!」

「カイン様つたらひどく〜い！！ そんなに大声で笑うなんてあんまりですわっ！」

まだ幼い私が腕を組みながら口を尖らせて頬を膨らませる表情を見るなり、カイン王子は声を高らかにして笑いはじめた。

それを抗議しても彼は可笑しくて堪らないと言わんばかりに笑い飛ばす。

文句を重ねれば重ねる程にカイン王子は滑稽に思えたらしい。

当時の私はそんな彼を兄のように慕い、そして幼友達のように接していた。

傍から見れば小さな少年と少女が剣術の真似事をした後に戯れているだけのように見えるのかもしれない。

無邪気なまでにおどけてみせる少年と頬を膨らませて不満を打ち明ける少女の姿を、誰が主従関係に見えるというのだろう。

だが、まだ幼かった私達はそれが当たり前だった。

厳しい稽古の中でも、剣を教わっている師匠が傍にいない時はサボって雑談に耽^{ふけ}てしまう。

戻ってきた師匠の説教など、話が弾めばもはや二人揃って覚えていない。

そして稽古が終わると二人並んで座り込み、まるで兄妹^{きょうだい}のように他愛のない話でまた盛り上がる。

厳しい修行で泣くことがあっても、二人一緒なら辛いとは感じなかった。

大人になっても二人の関係が変わらず続くものと思っていたのだが ある日突然、少年が発した言葉が二人の関係を变えていく。

「あ、あのさあ……大人になっても、ずっと傍にいて欲しい。死ぬまで一緒にいたいんだ！ だからさあ、大きくなったら僕のお嫁さんになつてくれないか？」

頬を染める目の前の少年は、自分で言っておきながら恥ずかしそうに目をキョロキョロと泳がせて落ち着かない様子だ。
でも、想いは強く感じられる。

「えっ!？　そ、そんな……そんなこと、きゅ、急に言われても……わ、わた……し……」

真剣な眼差しで見つめられているうちに鼓動が激しくなって心が揺らされていく。

顔が火照っているも自覚するぐらいだ。

真つ直ぐにカイン王子の顔を見ることが出来ない。

「僕はリアナが大好きなんだ。ずっと好きだったんだよ。だから大人になつたら僕と結婚して欲しい。ダメか？」

「わ、私……私なんかで、本当にいいんですか？　みんなから緑色をした髪の毛と目の色がへんだって……いつも、言われているのに……。そ、それにカイン様はお隣の国の皇女様と、け……結婚しなくちゃ……い、いけ……いけないんでしょう？」

私の瞳と髪の色が気味悪いと言わんばかりに、いつも誰となく陰口を叩かれていた。

艶のあるエメラルドグリーンの色であるが故に、好奇心な目で見られてしまうのは城の中だけではなく、街に出ても何ら変わらない。
そんな私を嫁にしたいと言われても、物心がつく前から抱え込んでいたコンプレックスが拒絶させようと邪魔をする。

偏見に満ちた眼差しで自分の外見を散々なまでに指摘され続け、まだ幼い心は十分に傷ついていたのだ。

だからこそカイン王子と二人だけの時間が私の心を満たしてくれる唯一の時間だった。

何時までも傍にいたい気持ちに何一つ偽りはない。

それはシエルフォート家の宿命というよりも、兄のように慕う少年の傍から離れたくないという強い想いがあるからだ。

まして想いを告げてきた目の前の少年はいずれ王位を継承し、隣国の皇女を妃として娶らねばならない。

幼いながらも分かっていた。

カイン王子の好意を受け取りたい反面、拒絶しようとする理性が強く働いてしまう。

「僕はヘンだとは思わないよ。まるで宝石のようにとても綺麗な瞳と髪の色だ」

優しい笑みを浮かべてカイン王子が私の髪に触れてきた。

顔を寄せて愛しむかのように何度も撫でてくる。

兄のように慕っていた人からの告白に、ただ戸惑うばかりだ。

恥ずかしさのあまりに心臓の鼓動が激しく乱れ、仰け反ろうとしても身体が思うように動かない。

真剣な眼差しから逃れたいのに、何故だか吸い込まれていくように感じてしまう。

「でも、王様達はみんなそうしてきたからって、王族の掟だって！」

「そんなの古い大人達が勝手に決めた都合だ。血がどうのこうのなんて僕には関係ない。僕はリアナじゃなきゃダメなんだ！ ずっと傍にいてくれると言ってよ！」

懇願する小さな眼差しに意識を絡め取られたまま、両肩にカイン王子の手の温もりが伝わってくる。

辛く切ないと思う反面、不思議と嬉しさが込み上げてくるのに何も言えない。

期待する言葉を待っている彼から火照る顔を背け、自分の感情を押し殺すしかなかった。

* * *

あの時の言葉はカイン王子が自分の立場を理解せず、その場の感情を吐き出しただけに過ぎないと何度も自分に言い聞かせた。

彼が私に恋心を抱くなど、本来なら決してあつてはならない。

しかし告白されてからは意識するあまりに、いつしか私まで彼に想いを馳せるようになってしまった。

王族の掟は絶対だと何度も言い聞かせても、自分の中で想いが膨れ上がっていく。

その後二人の関係に何も進展はなく、10年という月日は長いようで短くも感じた。

カイン様……貴方はまだあの日の言葉を覚えているの……。

この言葉を、いつたい何度繰り返したことだろう。

カイン王子は不意に何かを言いたげな表情をするだけで何も言うてくれない。

そして思いとどまった表情を浮かべると、私を避けるように顔を背けてしまう。

周囲の目を気にするあまり、言いたくても言えない様子だった。

カイン王子が何も言えないのであれば私から訊ねようと思っても、告白されたあの日以降からは誰かが絶えず彼の傍に居た為にそれも叶わない。

結局、二人だけの時間を許される日が訪れることはなく、カイン王子がイスマリア皇女との婚礼が決まったのは半年ほど前のことだ

った。

もはや想いが叶うことはない。

なのに諦めようとしても、恋焦がれる想いだけが募っていく……。

「リアナ様、どうかなされたのですか？ 何やら深刻にお考えになられているご様子ですが……」

物思いに耽っている馬上の私に、同行していた一人の兵が轡くつわを並べながら尋ねてきた。

分厚い鎧兜で身を包み、一見厳つい顔立ちのように見えるその兵は、心配そうな面持ちですっと見つめている。

「い、いや……何でもない。少しばかり考え事をしていただけだ。ここまで妖魔と一度も遭遇しなかったのが、どうも腑に落ちなくてな。最近やけに活発な動きを見せている妖魔達がまったく姿を現さない。なのに一度は感じた奴等の気配が今は完全に消えてしまっている。妙だと思わないか？」

不意を衝かれた思わぬ問いに、心を見透かされまいと咄嗟に浮かんだ言葉を投げ返した。

我ながら呆れるほど本音と違うことを言ったものだと感心してしまふ。

だが、それは事実だ。

ランガーナ王国の国境を越える前日、一度だけ殺気に満ちた人ざらぬ者達の気配を感じた。

いつもなら魔物を従えた妖魔が襲い掛かってくる。

ところが今回一度も襲撃を受けぬどころか姿すら見せてこない。

故に訊ねてきた兵は眉間に皺を寄せて考え込み、咄嗟に浮かんだ言葉を信じたのであろう。

「近頃は辺境の町とはいえ、我が国の領内が幾度も奴等の襲撃を受けています。なのに少数で動いている我々が今まで一度も襲撃を受けていない。確かに、言われてみれば妙ですな。もしや何かを企んでいるのでは？」

「ああ、だから皆にはくれぐれも気を抜くなと伝えてくれ。イスマリア皇女をお連れする帰りの道中は、特にな……」

「はっ！！」

一礼した兵が跨る馬を巧みに操って後方に下がったのは、アステルベルク領内に入った頃だった。

草原の彼方に多くの建物らしき影がぼんやりと見える。

「ふうう……」

でも、嘘は言っていないよね。

ふと、そう思いながらも安堵の溜め息が漏れた。

兵達に気を抜くなと言った自分が滑稽でならず、口元が自然に緩んでしまう。

そもそも自分を偽るこの振る舞いは堅苦しく、常々苦手だと思っていた。

聖騎士としての立場上、兵達の前では素の自分を見せることが出来ないと分かっている。ただ窮屈なだけで億劫にすら感じている。

（気を抜くな……かあ……。そうだ、今はイスマリア皇女を無事にランガーナへ送り届ける事だけに専念しなければ！）

今は感傷に浸っている場合ではないともう一度自分自身に言い聞かし、今度こそ気を引き締めなおそうと思っても、やはり想い人の

姿が浮かんでしまふ。

ランガーナの王位後継者はアステルベルク皇家の血を引く女性を娶らなければならぬのが王族の掟。

それに私はカイン王子と幼少の頃から共に育った仲。

言わば兄妹きょうだいのような仲だと言つてもいい。

ましてシエルフォート家の一人娘として生まれたからには、王位後継者が国王の座に就いた後も守護しなければならぬ宿命を背負っている。

聖騎士という重責までも与えられてしまえば尚更だ。

もしかすれば、父はその為私を今回の護衛に推挙したのではないだろうか。

若輩の身分で聖騎士に選ばれたのも、あの幼き日の事を誰かが見ていたのではないだろうかと勘ぐってしまう。

過ぎてしまった事をいつまで考えても……。

打ち明けられぬこの秘めた想いは、いくら願つても叶うことはないのだ。

ならばイスマリア皇女をランガーナまで無事にお連れし、婚礼の儀が滞りなく終えれば諦めもつくだろう。

胸が張り裂けんばかりに苦しいのも、時間ときが経てばいつかは消える。

もしも心の傷が癒えなければ、癒えるまで泣けばいい。

泣いて全てを洗い流し終えれば、やがて現実を受け入れられる日が訪れ、シエルフォート家の宿命を素直に受け入れられる筈。

その時には新国王と王妃となられたお二人を心から祝福する事だつて出来るだろうし、家名と聖騎士としての責務を果たせると思う。そして夫として運命さだめられた男ひとを愛して子を産み、年老いて家族に看取られながら生涯を閉じれば、女として十分に幸せな一生と言えるのではないだろうか。

そうでも思わなければこの先ずっと生きていくことが辛いと思つた時、優しいまでの温かい風が吹き抜けていった。

まるで土の香りが漂う空気の流れが私を慰めるかのように包み込んでくれる。

自分の長い髪が頬に触れながら靡く先に、アステルベルク城とその城下町の輪郭がくつきりと見えてきた。

心を見透かす声 　　Voice 　　

ランガーナ城へ向かう道中、イスマリア皇女は馬車の窓を何度も開けては馬上の私に話しかけてくる。

隣国といつてもカイン王子が待っているランガーナ城までは3日間という時間を費やさなければならぬ。

故にたった一人で馬車の中にいるのが退屈で心細く、とても不安に感じているのである。

確かイスマリア皇女はまだ19歳になられたばかりだと聞く。

彼女は私より年上とはいえまだ若い。

如何に高貴な身分のお方だといつても、会話で気分を紛らわせない気持ちがよく分かる。

これから顔も知らない隣国の王子に嫁がねならない身の上であるが故に、不安な気持ちを誤魔化そうとしているように思えて不憫ふびんに感じてしまう。

可憐なまでにあどけなさを残した美しい姫君だからこそ、そう思ってしまったのだろうか。

「ウフフ、まさか貴女のような可愛らしくてお美しい方が、ご高名なランガーナの聖騎士のお一人だったとは思いませんでしたわ。お若い女性の方がいらつしやるとはお聞きしていましたが、もっと猛々しいまでの勇猛な女性かただと思っていましたの」

自分で思い描いていたイメージを、無邪気な笑顔でイスマリア皇女が突拍子もなく投げつけてきた。

彼女にお供する者は私を除けば皆男ばかりだからこそ、年齢が近いのもあって話しかけるには最適な相手だと思ったのだろうか。

しかし己に課せられた使命を顧みれば、同情はしても会話の相手などしてられない。

馬車と寄り添うように絶えず離れなかったのは、あくまでもイス
マリア皇女の御身を守ることを優先しただけに過ぎないのを、少し
は理解して欲しいものだ。

妖魔の襲撃が今すぐあってもおかしくないのを、このお方は全く
分かっていない。

「四神の称号をお持ちになられる聖騎士と呼ばれる方は、この世に
たった4人しかいないとお聞きしています。ですから想像していた
イメージと随分違っておりました、少しばかり驚いてしまいました
の。でも良かったですわあ、怖そうな方じゃなくて」

それにしてもよく喋るお方だ。

今まで敢えて聞き流していたが、ずっとこのまま窓からお顔を出
されていては妖魔共にいずれ見つかってしまう。

「イスマリア様、いい加減になさって下さい！　ここが既にランガ
ーナ領内といっても、婚礼の儀を控えて出立されたことはおそらく
妖魔共に知られております。どうか馬車からお顔を出されるのは、
もう控えて頂けませんか？」

自分がどう思われようが気にしていられない。

今は課せられた使命をやり遂げる。

ランガーナ城まで無事にお連れする事を考えれば、たとえ彼女に
憎まれても別に構わない。

(下手に懐かれるより、嫌われた方がまだ気が楽だ……)

屈託のない潤んだ瞳で見つめられると、ふいにそう思ってしまう。
ましてこのお方は今の自分には恋敵同然といえる女。

たとえ私なんかと身分が比べられない高貴なお人であっても、そ

んな女性に馴れ馴れしく話しかけられるのが迷惑に感じてならない。自分がカイン王子とイスマリア皇女の関係に嫉妬しているだけなのは十分に分かっている。

だが間違ったことは何一つ言っていない。

護衛を任された立場を弁えれば、当然のことを言っただけ。

故に私を含めた兵達全員が旅の商人に扮してランガーナ城へと向かっている。

イスマリア皇女が乗っている馬車も、商人が旅に使う馬車に装っているのもその為だ。

当然ながら彼女の衣装も出発前に着替えさせ、旅をする商人の娘らしいものを着させている。

僅かな兵だけではイスマリア皇女を守る手立てはそれしかない。

旅の商人一行として成りすまし続けるには、自分の身を守る鎧兜が邪魔になる。

誰一人として防具を身に纏わず、武器になる物は各自が隠し持った短剣と僅かな火薬玉、それと私だけがこの中で唯一扱える魔法のみ。

アステルベルク城へ入城を前に合流した神聖獣ミックですらも、本来の翼が生えた銀毛の猛獣のような姿から今は愛らしい猫の姿に変え、馬車の中からイスマリア皇女を守る役目に徹している。

「そうは申されましても、馬車の中が私独りではとても退屈ですわ。少しでも話相手をして下さる方が欲しいだけなのに。はああ、せめてナスターシャだけでもお供に加えさせていただくのを許して下さいゃ……」

私の嗜める言葉に、イスマリア皇女がつまらなさそうに溜め息を漏らした。

ナスターシャとは、おそらく自分に仕える侍女の名前なのだろう。常に身の回りの世話をする侍女達が片時も傍から離れた事がない

であろうイスマリア皇女にとって、たった一人で窮屈な馬車の中に乗っているだけでは退屈な時間ではかなく、牢獄の中へ閉じ込められているようすら感じているのかもしれない。

ましてアステルベルク城を出発して以降、彼女を今日一日馬車の中から出していなかっただのであれば尚更だ。

しかし、これもイスマリア皇女を妖魔達から守るための処置なのだから仕方がない。

今夜泊まる宿に到着するまでは、外の空気を吸うことすらも我慢してもらおうしかないのだ。

「それは我々も重々承知しております。どうかお許し下さい。しかしお言葉ですがイスマリア様、我々が旅の商人に扮している意味をよくお分かりになられていますか？」

「はい、よく存じておりますわ。その為に私^{わたくし}だけでなく、リアナ様達もそのような格好をなされているのでしょうか？」

言葉では分かったように言っておきながら、やはりこのお方は自分が置かれている状況をまるで分かっていない。

ようやく得た話し相手を逃がすまいとも思っているのか、イスマリア皇女の表情に無邪気なまでの笑顔が浮かんでいる。

まるで咎めている言葉にすらも楽しまれているといった様子だ。

普段からこのような調子では、いつも世話をしている侍女達の気苦労が分かるような気がしてしまう。

「分かっているらっしゃるなら、宿に到着するまではどうかご辛抱を。出発の折にも申し上げましたが、妖魔はいつ襲ってくるのか分かりません。ですからそんな風にお顔を出されては元も子もないのです」

「そこを何とかならないものでしょうか？ このままでは気が滅入

つてしまいますわ」

「ご心中はお察ししますが、御身に万が一でもあってはならないのです。ですから窓を開けるなんて軽はずみな行為は謹んでいただかないと」

「でも、少しぐらいは……」

「駄目です！！　どうかお許しを！」

怒鳴るように言い放ち、イスマリア皇女の背後にいるミックに無言で相鎚を打つ。

するとミックは猫の鳴き声とは思えぬ大きな奇声で彼女の気を引き、振り向き様に疾風の如き身の軽さで飛び跳ね、一瞬のうちに窓を壊さんばかりの勢いで閉めた。

一見、銀色の毛並みをした猫のように見えるミックは人の言葉を理解して喋られるが、イスマリア皇女を驚かせてはならないから一言も喋るなど言いつけてある。

あくまでも護衛が目的であり、彼女の退屈凌ぎという意味も兼ねて馬車へ乗せているだけにすぎない。

イスマリア皇女が誰かと会話がしたい気持ちはよく分かる。

常に侍女達がお相手をしていた城の中とは違い、狭い馬車の中で誰とも会話がなく独りているのは不安で、とても心細いことだろう。

だが、いちいち我がままを聞いてはられない。

辺りは草原が広がって妖魔が襲い掛かってきても身を隠す場所がなく、ここで襲撃を受ければ万が一のことが考えられる。

ランガーナ領内の辺境にある小さな街まではもう直ぐだ。

故に今しばらくは辛くとも我慢をして頂かねばならない。

たとえ冷たい女だと思われようとも、彼女を守るには一番の得策だと思っただからだ。

(日が暮れてしまつまでに急がなければ！)

遠くに連なる山々の向こうで太陽が今にも沈もうとしていた。

空が茜色に染まり、微かに星の輝きが見える。

あれからイスマリア皇女が馬車の窓を開ける様子はない。

強く言い過ぎたかもしれないが、これで気を散らされることもなく神経を張り巡らせて辺りの様子を伺う事が出来る。

そう思った時だった。

『おやおや、女の嫉妬とは怖いものじゃな。リアナよ、恋敵といってもあの言い様では冷た過ぎるのではないか？ あれではイスマリア皇女が可哀想じゃ。もう少し優しく言つてやれんものかのう』

私の心に直接問いかける老人のしわがれた声が唐突に皮肉を込めて言い放ってくる。

この声はミック以外の他の者には聞こえない。

人間で聞こえるのは私だけだ。

ミックも馬車の中では流石にペンダントの言葉は聞こえてはいないだろう。

老人の声は私が肌身離さず身に付けている真紅のクリスタルが埋め込まれたペンダントから発せられた声だ。

それはただ胸元を飾るものではなく、聖騎士の証でもある。

聖騎士に選ばれた者は、神の力が宿つたと言われる秘法をランガーナ国王から与えられるからだ。

私が与えられたのが四つの秘法の一つであるこのペンダントであり、ランガーナの守護獣と称される神聖獣を従える事も許された。

聖騎士になつた私を、このペンダントの声がいつも助言してくれる。

如何なる苦境に立たされようと、このペンダントが私に大いな

る力も与えてくれた。

しかし、常日頃感謝していても今は違う。

先程の言葉を聞いてからは、言いし難い心の痛みと怒りを感じずにいられない。

私の心を見透かした拳句、皮肉を込めた言葉を投げつけてきたからだ。

(だ、黙れ！ 私はただ、イスマリア様を無事に……！)

反論しようにも取り繕う言葉を選びきれず、そのまま黙り込んでしまう。

この声には心が筒抜けだから何を言っても無駄なのは分かっているからだ。

しかし自分の想いは私だけのもの。

裸を見られる恥辱以上の屈辱を感じてしまう。

この愚弄ウソに対して黙っていられないのに、何一つ言葉が見つからない。

『そう剥きになるのが認めているようなものじゃ。イスマリア皇女に八つ当たりするのは筋違いじゃて』

(だ、黙れ！ 言うな、もう何も言うな！)

咄嗟にペンダントから発する言葉を遮っても、それは認めてしまったと言っているようなもの。

顔が羞恥に染まっているのを自覚してしまう。

これ以上自分の心の中を穿り返されるのは耐え難い。

気がつけば胸元のクリスタルを握り潰さんばかりに強く握り締めていた。

「クツ、ククク！ ワシにまで八つ当たりするのは良くないぞ。身体は大人になりつつあっても、やはり精神はまだまだ子供じゃわい。聖騎士たる者がそれでは、この先も思いやられ……」

（き、貴様っ！ もういい加減にしろー！）

「……………分かった、もう喋らん……………」

しわがれた老人の声があった通り、いくら屈強な男達よりも剣の腕が優れ、誰よりも魔法に秀でていようが私の心はまだ未熟なのだ。身体が子供から大人の女になりつつあっても、精神がまだ子供のまま成長していないのは承知している。

父の目が届かない場所で女性らしい振る舞いや言葉使いをしているても、所詮は上辺だけの姿……………。

イスマリア皇女や兵達の前で毅然とした言動をしている今も、未熟な自分を晒したくないだけなのかもしれない。

ランガーナの聖騎士というには、私の精神はまだ幼すぎるようだ。何故かそう思わずにいらなかった。

二人の皇女 〱 Princess 〱

後にミツクから聞いた話では、イスマリア皇女はあれから黙つて身動きもせず、椅子に座つたまま寂しそうにしていたらしい。

愛嬌のある猫を演じてもまつたく近づこうとせず、興味を示さなればかりか彼女には近寄りがたい何かを感じるとも言っていた。

話で聞く様子からして気の毒なことをしたと思うが、護衛を任されている私の立場からして何も間違つたことは言っていない筈。

故に妖魔の襲撃を一度も受ける事もなく、陽が暮れてしまう前に我々はランガーナ辺境にある小さな町まで無事に辿り着くことが出来たと思う。

イスマリア皇女の輿こし入れは隠密で行われている為に、当然ながら彼女の身分は隠している。

もちろん私や他の護衛の者達も身分を隠し、我々は旅をしている商人の一行と称して宿をとつた。

町の人々や宿屋の主が我々の素性に気がついた様子が無かつたことから、変装は上手くいったと思つていいだろう。

ただ、私の髪の色を好奇心な目で見られていたのが、何とも複雑な気分させられる。

「城のお部屋と比べたら狭いかもしれませんが、一晩だけですからどうかご辛抱なさつて下さい」

「いえ、とても素敵な部屋ですわ。見たこともない物がたくさんありますもの」

旅をする商人の娘らしい格好に似合わず、この姫君は気品溢れる物腰で微笑み返してくる。

ようやく狭い馬車から開放されたことが余程嬉しかったのか、飾

られた装飾品を乐しげに見つめていた。

我々が何気なく手にして見るこの地方独特の民芸品が、温室育ちの姫君にとっては何もかもが新鮮に感じられたのかもしれない。

「そう言っていただと助かります」

この様子であれば、一晩泊まるだけならご不自由に感じないだろうと思いつつイスマリア皇女に背を向け、二人だけでは広すぎる部屋の中に異常がないかと調べまわる。

宿屋の中でも一際大きな部屋をイスマリア皇女の部屋にしたのは、少しでも多く旅の疲れを癒してもらおう為だ。

私とミックが彼女と同じ部屋に泊まることにしたのも、ただ単に間近で護衛するというだけの目的ではない。

少しでも気分転換になればと話し相手も兼ねている。

部屋から一歩も出せないのであれば、せめて会話の相手ぐらいしてあげなければ精神的に参ってしまうだろう。

但し、窓はカーテンで閉ざし、扉も常に鍵を掛けた状態にしている。

念の為にイスマリア皇女を窓や扉には近づけさせないように細心の注意を払う。

これも妖魔に見つからない為の処置だから我慢してもらおうしかない。

あとは私とミックを除く他の護衛達は別室に部屋を取らせ、とりあえずは私が呼べば直ぐに駆けつけられるよう手筈は整っている。

兵達を信用していないわけではないが万が一のことも考えられ、さすがに男を部屋の中には入れられない。

それにイスマリア皇女も気になって、ゆっくりとお休みになれないだろう。

彼女を一人にするわけにもいかない為に、嫌な役目だが私が傍にいるしかない。

ところが当のイスマリア皇女はしばし部屋の装飾品を眺めていたかと思えば、大きなソファへ座るとすぐに眠ってしまった。肘掛に両手を添えて枕代わりにし、うつ伏せのような格好になって深い眠りについておられる。

今日一日中ずっと馬車に揺られながらお過ごしになられ、初めての旅というのもあつて心身共に疲れ果てたのであろう。

私は彼女を起こさないようにそっと毛布を掛けるとテーブルの前にある木製の椅子に座り、その無邪気な寝顔を何気なく見ていた。

「ふう……。こんなの、本当は性に合わないのに……。もう、お父様だったら、こんな役目を私に押し付けちゃって！」

ふと、思わず小さな溜め息と共に愚痴を溢してしまふ。

張り詰めていた緊張から解放されたからなのか気が緩んでしまい、人前で見せる“偽りの仮面”を脱いで素の自分へと戻っていく。

臣民から聖騎士と呼ばれようが、こんな私でもあと数日で17歳の誕生日を向かえる年頃の女の子。

たまには化粧を試みたり、華やかなドレスで着飾ってみたいという美への願望だつてある。

一度でもいいから気兼ねなく、自分をめい一杯表現してみたい。

なのに小さな頃から剣と魔法に明け暮れる毎日が続き、人前で女性らしい振る舞いをしてしまえば父に叱られてしまふ。

気がつけば普通の女の子らしい振る舞いがどういったものなのかすらも、正直よく分からなくなつてしまつていた。

同年代の女の子達はどのようにしているのだろう。

好きな殿方を想いながら恋の歌でも歌い、野に咲く花を愛でたりしているのだろうか。

頭の中でいろいろな事を想像しても、男性が喜ぶ言葉使いや仕草をどうすればいいのか何一つ知らない。

それだけでも正直辛いのに、添い遂げる伴侶を自分で選ぶことが

許されないばかりか、王家の許しが必要ならば結婚をすることすら叶わない。

シエルフォートという家名、そして聖騎士としての責務が私から女性として当然の権利を奪い去っている。

なのに私は終生仕えるべきカイン王子を愛してしまった。

だが、この想いを伝えることすらも許されない。

まして厳格な父がカイン王子への想いを知れば、どうなるのかは目に見えている。

親子の間だけでも素の自分を見せられないのだから当然だ。

ならば、せめて誰も見ていない時だけでも本当の自分に戻りたい。それが唯一許される私の我がままなのだから……。

「ぐっすり眠っているニヤ。でも、ベッドで寝かさニヤくていいの？」

「いいのよ、そのまま寝かしてあげなさい。今まで城の外に出たことがないのに、今日一日中ずっと馬車に揺られていたのだから、お疲れになられて当然よ。無理もないわ。ミツクも疲れているんなら先に寝てもいいわよ」

「オイラは平気だニヤ。リアナは眠たくニヤいの？ 食事も摂ってニヤかったし、少しでも休まニヤければ身体が保たニヤいよ」

「平気、平気、大丈夫よ。私はもう少し起きているわ。それにお腹も減ってこないし……。クスッ、イス MARIA 様の寝顔って、ホント可愛いわよね。なんだか羨ましくなってきたわ」

肩の力を抜いて誰かと会話が出来る喜びが全身を駆け巡る。

私から女としての権利を奪った聖騎士としての立場が、ミツクという話し相手を与えてくれたのはなんとも皮肉な話だ。

たとえ僅かでもこの自由な時間を満喫したいと思う反面、安らかな寝息をたてるイスマリア皇女に僅かな時間でも会話の相手をしてさしあげるべきだったと後悔してしまう。

「うん、リアナに負けないぐらいに可愛い寝顔だニヤ」

「ありがと、お世辞でも嬉しいわ」

無邪気な寝顔のイスマリア皇女をミツクと一緒に見ているうちに、もし彼女が普通に生まれてきたのなら、もっと自由に生きていたのではないかと何故か自分と重ね合わせて同情してしまった。

城内で大事に育てられた温室育ちの姫君が初めて下界に出られたというのに、これから隣国の顔も知らない男ひとの元へ嫁がなければならぬ。

おそらく嫁ぐ前にもっといろいろな物を見て、いろいろと触れたかったと思っっていることだろう。

お互いに自由がなかった身の上といっても、まだ私は多少なりとも自由があったのかもしれない。

少なくともいろんな人達と出会い、物や野に咲く草花に触れることが出来た。

たとえ許されぬ恋だとしても、私は心の底からカイン王子を好きになれたのだ。

幼少の頃、他愛のない話に笑い、厳しい剣の稽古で共に泣きながら励まし合う姿が今でも鮮明に覚えている。

そしてあの日の言葉で初めて自分が女だと意識するようになり、身分の違いを思い知らされたことも……。

（イスマリア様は誰かを好きになったことってあったのかなあ？）

ふと、そんな疑問が何気なく頭に浮かんだ。

だが、イスマリア皇女はこれから私が想いを寄せるカイン王子の妃となられるお方。

本当はそんな人の護衛なんてしたくないと思うあまり、しばらく口を噤んでしまっていた。

幼少の頃から剣と魔法の修行を続けて今の立場となった私とは違うも正反対の人生を過ごされてきたのに、お互い自由のない者同士なのがなんとも皮肉なものだと思ふ反面、憎しみに似た嫉妬の炎を彼女に向けている。

このお方はただ掟に従って好きでもない男へ嫁いでいくのを頭では理解をしていますが、女々しいまでの諦めきれない気持ちに嫉みとなって心を大きく揺れ動かしていく。

「リアナア、このお姫様って本物ニヤのかい？」

ミックが突拍子もなく尋ねてこなければ、心が醜く染まって自分が嫌な女になっていたのかもしれない。

そう思うとこの一言によって現実に引き戻されたおかげで、負の感情という闇の中に取り込まれずに済んだような気がする。

「本当は知っているんじゃないの？」

私達が今回の護衛の任に就いた時の事を思い出せば、つい言いたくもなる質問だろう。

果たしてこの姫君は本物のイスマリア皇女なのか！？
それは彼女を護衛する我々全員が疑問に思っている事だ。

私一人だけが父に連れられてアステルベルク皇王との謁見の場を与えられた最中でさえも、イスマリア皇女のお姿を一度も拝見する事が適わなかった。

故に静かな寝息をたてるこの方が囿として用意された偽者かもしれないと思っても仕方がない。

そう……すべてはあの時、父ファンヴェルが皆を呼び集めた時からこの疑念は生まれていたのだ。

* * *

父は私達よりも2日前にアステルベルク皇国へ訪れていた。私にすら黙って先に訪れていたぐらいなのだから、今回の護衛に関する何らかの話があっただけかとは思わないと思う。

理由について尋ねてみたがアステルベルク皇王と直接話がしたかったと言っただけで、護衛の計画についても詳しく教えてくれなかった。

如何なる事情があるにしても、私は娘である前に同じ聖騎士として聞く権利があります！

そう問質したところで軽くあしらわれて相手にすらしてくれない。一度は背を見せて目の前から去っていった父が皇王へ出発前の挨拶を済まして私達の前に戻ってきた時、その背後にはフードの付いた純白の法衣を纏った二人の女性の姿が一緒にあった。

お顔がフードに隠れていて見えず、アステルベルク皇家の紋章がついた純白の法衣を纏った二人の女性の後方に数人の侍女を引き連れていることから、どちらかがイスマリア皇女だということが辛うじて理解できたぐらいだ。

その場にいたランガーナの兵達が皆驚き戸惑ってしまったても無理はない。

突然のことで私も状況が直ぐに飲み込めなかった。

皇家の紋章がなければ、二人の女性の身分を窺い知ることも適わなかっただろう。

これがどういった意味をもつのかと、その時は正直よく分からなかった。

それを父は何事もなかったように見ていたのをなんとなく覚えてる。

しばらくして、揃いの法衣を纏った二人の女性は一言も発することなく、侍女達に招かれるまま並べられた2台の馬車へと向かっていった。

それぞれが2台の馬車へ乗り別れるまで法衣を脱がず、侍女達を除いて皇女らしき彼女達の素顔を誰一人として見ていない。

結局は私がお守りしているイスマリア皇女のお顔を拝見したのも城下町を出たあとぐらいだった。

彼女が時折窓を開いて話しかけてこなければ、宿に到着するまでお顔を拝見することもなかっただろう。

そして私達が父の前に呼び集められたのは出発が目前に迫った時だった。

「諸君らが見ての通り、ここには2台の馬車がある。一方にはイスマリア皇女が、そしてもう一方にはイスマリア皇女に扮した別の者が乗っている。つまり、これは妖魔の目を惑わせる為だ！ よって本物のイスマリア皇女がどちらの馬車へお乗りになられたのかは妖魔共に悟られる恐れがある故、ランガーナ城へ到着するまでは諸君らにも教えることが出来ない。無論、その詮索も遠慮してもらおう。これも無事にランガーナ城へ到着する為だ、済まないが悪く思わんでくれ。尚、アステルベルク領内を出た後は馬車を二手に分かれさせ、それぞれ別のルートを辿ってランガーナ城へと向かってもらう。一方はリアナ・シエルフォートに指揮をしてもらい、もう一方は私が率いて護衛にあたる。もう分かっていると思うが、どちらか一方は偽者を守る事になる。しかし！！ イスマリア皇女を護衛する事には何ら変わらない！ よいか、各々それを肝に銘じて任務を全うせよ、以上だ！」

父ファンヴェルがそう言っていたのを踏まえてみれば、アステルベルク皇王との間に護衛計画の密談があったと思っただけ。

そして、その際にお顔も拝見している筈だ。

2台ある馬車の一方に、本物のイスマリア皇女がお乗りになられているのはどうやら間違いないらしい。

父にそれとなく本物のイスマリア皇女がどちらの馬車に乗っているのかと尋ねてみたが、知らないという素振りを見せるだけで相手にすらしてもらえなかった。

私達がランガーナ城へ向かうルートを口答で告げた以降、話にも応じてくれない。

これでは二人の皇女を見分ける事など出来ないのは当然。

今までアステルベルク城内から一度も外に出られた事がなく、まして一部の限られた者にしかお顔を拝見させていないのであれば、外部の人間がイスマリア皇女のお顔を知っている筈もない。

私も彼女の名前と高い法力、つまり治癒系や防御系魔法といった白魔術的なものに優れたお方だとしか知らず、法力についても魔法とは違った聖なる力としか詳しい知識もなかった。

法力とは、世間一般に知られる僧侶の白魔術とはまた別物らしい。ならば聞いた馬車の中の様子からしてイスマリア皇女はともかく、ミックが彼女に近寄り難い何かを感じたものこそが、その法力と呼ばれし聖なる力ではないのか。

確かに彼女からは高貴な者が放つ独特の気高い雰囲気こそ感じられるもの、神聖獣であるミックがそれに気圧されて近寄れなかったとは俄かに信じ難い。

まして静かな寝息をたてるこの美しき姫君が今まで芝居を演じていたようには見えなかった事もあり、やはり本物のイスマリア皇女ではないかと思えてしまう。

それを考えると今更ながら重く押し掛かるプレッシャーを感じ、自分に課せられた役目は如何に重大であるかとあらためて思い知ら

された。

疑惑と偽ざる本音 〱 Honne

イスマリア皇女の護衛に関して、誰もが感じる疑問を私なりの解釈を付け加えながら説明していくにつれ、ミックは言葉の端々で領きはしても、時折考え込む表情が増していた。

目の前のテーブルの上で普通の猫らしい佇まいで耳を傾けつつ、状況は理解をしても納得がいかないといった様子だ。

ソファアでお休みになられているこのお方が本物かどうか素性を知らないままでは、今後お互いの信頼関係を築く上でも大きく影響を及ぼすと感じているのではないだろうか。

知ったところでこの姫君を守らなければならないのは当然だとしても、疑念を抱いたままでは我々全員の士気に関わるのではないかという懸念が残るのは確かだ。

まして私自身の個人的な感情からしても、彼女の素性を知りたいという本音があるのは否定できない。

ミックはただ自分の気持ちに正直すぎただけなのだ。

ただ、このお方の素性云々に関わらず、この3日間の旅がランガーナ王国とアステンベルク皇国の行く末を左右していることだけは確かだろう。

「と、言うわけ。だから私だつてどちらが本物のイスマリア様なのか、本当に知らないのよ」

「ふ〜ん……で、どうしてリアナにまで秘密ニヤンだ？」

「聞くところによれば、イスマリア皇女にお会い出来るのは皇家の血縁者でも限られ、お仕えする侍女もごく一部の者だけらしいわ。人間に化けて本人に成りすましてしまう妖魔もいるんだし、どこで聞き耳をたたえているか分からないでしょう。だって私達も知らなけ

れば、その分だけ妖魔達に知られてしまうリスクが減るじゃない。だからお父様は私にも秘密にしているんだと思うの。」

私が言った事はあながち間違いではないと思う。

故に共をしている兵達にアステルベルクの者はいない。

他の部屋で待機している者は皆、私達がランガーナ城を出立する前に父が選んでいた。

妖魔が誰も知らない者に成りすましてしまえば、その者が本物かどうか見極めるのが困難になってしまうからだろう。

ランガーナ王国次期国王の王妃となられるイスマリア皇女をお連れするのに対し、護衛の数があまりにも少なすぎる理由としても、旅の商人の一行として妖魔の目を欺く為だと言えば納得もいく。

更に護衛をする者達が互いに性格までもよく熟知している者ばかりに限定すれば、たとえ妖魔が如何に巧く化けようとも見分け易くなる。

無論、兵達も“偽りの仮面”を被った普段の私をよく知っている者ばかりだ。

父はそう思っただけで人選したに違いない。

別のルートからランガーナ城へと向かっているもう一人のイスマリア皇女を護衛する者達も、同じ理由で人選されていることを踏まえると説明がつく。

妖魔達の目から逃れながら無事にランガーナへお連れする僅か三日間の道中にもかかわらず、彼女をお守りする我々にまで本物のイスマリア皇女について教えられない理由には、昔からアステルベルク皇国で女性達が妖魔によって攫われる事件が度々あったからだと思われる。

また、それはイスマリア皇女との謁見を自国の大臣にすら許されていない理由にも繋がっているとみて間違いないだろう。

私を知るかぎり、妖魔に攫われた女性達は皆、例外なくミイラ化した遺体で発見されたようだ。

「もういい加減にしてよ！ 話が進まないでしょっ！」

この下品極まりない下卑た表情と言動が許せない。

目を鋭く吊り上がらせ、怒りと嫌悪を混じり合わせた感情を叩きつける。

ところが当の変態スケベ猫は反省しようとする素振りを微塵にも見せない。

「そ、そんニヤ怒んニヤいでよ。ちゃんと真面目に聞くから……」

しばらく無言のまま睨みつけると、ミックは上目遣いのまま小さな子供が頭を抱えるような仕草で私が許すのを待っている。

本当なら勢いに任せて捲し立ててやりたいところだが、ぐっすりとお休みになられているイスマリア皇女を起こしてしまうわけにはいかない。

横っ面をおもいつきり引っ叩いてやりたい気持ちを懸命に抑え、怒りで昂った感情を落ち着かせるしかないようだ。

「……………もう、ちゃんと聞いてよね！」

ここは仕方がなく彼女が目覚ます様子がないのを確認し、ミックに釘を刺して話を続ける事にした。

目の前の輩が卑猥な妄想を膨らした原因は、被害者が未婚で若い女性ばかりだったからだろう。

そして攫われた人達にはもう一つの共通点がある。

法力という特殊な能力を秘めている者　つまりアステルベルク皇家の血筋を引く未婚の女性に限られていた。

妖魔達はおそらくその法力を奪うために体液を吸い取ったのではないかと言われている。

法力が高ければ高いほど妖魔の力が高まるということが事実なのであれば、長いアステルベルク皇国の歴史の中でも類まれな法力の持ち主であると噂に聞くイスマリア皇女は、奴等にとってまさに格好の獲物だと言えるだろう。

彼女の叔母にあたるエルダ皇女がその被害者の一人であった事を顧みれば、妖魔達がイスマリア皇女を求めているのはまず間違いない。

私達がアステルベルクへ向かう道中に感じた妖魔らしき気配あれは我々の様子を探っていたのではないだろうか。

一度も姿を見せなかったとはいえ、奴等は必ず襲ってくると思っただ方がいい。

そしてイスマリア皇女が生まれてから一度も城の外に出してもらえず、僅かな侍女と皇家の血縁者といっても一部の者しか接する事を許されなかったのは、エルダ皇女の一件があつたからだろう。

これは法力を宿した高貴なる純潔の血が、妖魔の力を高めてしまふという話と一致する。

父ファンヴェルだけが先にアステルベルク皇国へ訪れていたのも頷けるというものだ。

故に最悪の事態を避ける為にも、今回の護衛が神経質なまでに慎重を喫しているのは至極当然だといえるのではないかと思う。

但し、これは全て私の単なる憶測にすぎないのだが……。

「　　　つていうわけ。だから妖魔達にとってイスマリア様は、まさに極上の獲物じゃないかと思うの。私だってアステルベルク皇国に来たのは今回が初めてなんだし、これ以上はなんとも言えないのよね」

「でもさあ、リアナア……もしも妖魔達に姫様の事がバレたニヤら、オイラ達だけで守れるの？　この人がもし偽者ニヤら、どうするつもりニヤの？」

ミツクの言い分も分かる。

我々が商人に扮しているのが妖魔達に知られでもすれば、イスマリヤ皇女を守り抜くのは難しくなる。

おそらく奴等はそれなりの手勢で襲い掛かってくる筈だ。

ミツクはその方が一の事が気懸かりでならないのだろう。

下級妖魔だけの手勢ならば問題はない。

たとえ強力な力を持つ上級妖魔が複数いたとしても、退けるぐらいの力があると自負している。

しかし、私とミツク、それと僅かな兵達だけでイスマリヤ皇女を守りながら戦うとなれば、撃退するどころか防戦一方になってしまうのが目に見えている。

このお方を攫われまいと奮戦したところで、果たしてどこまで持ち堪えられるのかという不安が拭いきれない。

たとえ我々が無事であっても、命がけで守らなければならない姫君の身柄を奪われてしまうことだって考えられる。

この可憐で美しいイスマリヤ皇女がもしも攫われてしまったら、過去に攫われた女性達と同様に法力を吸い尽くされて悲惨な末路を迎えてしまうだろう。

(この人が本物のイスマリヤ皇女だとしたら……。もしも妖魔に攫われでもすれば……)

仮にそうなってしまうえば、おそらく聖騎士の称号を剥奪されてしまうだけでは済まない。

私自身が相応の責めを受けるのはともかく、シエルフォート家の存続自体が危ぶまれるだろう。

しかしカイン王子が結婚をしなくて済むのなら、如何なる厳罰を受けても構わないと思ってしまってもう一人の自分がいる。

死をもって償うことにでもなれば、自分の気持ちを隠す必要もな

くになると心に語りかけているような気がしてならない。

思えばシエルフォート家という名誉ある家名と聖騎士としての称号に誇りと責任感を感じながらも、同時に己の身を幾度となく呪ったことだろうか。

たとえカイン王子と結ばれなくてもいい。

報われぬ想いであるのは十二分に分かっている。

めい一杯の想いを込めた“好きです！”というたった一言さえ伝えられさえすれば、それだけで十分なのだ。

だが、私にはその一言さえ許されない。

想いを伝える事さえ叶えられたら　そんな邪念が私の理性を蝕んでいくように感じてしまう。

（わ、私……なんて事を！　ダメだ、もう考えちゃダメだ！！　イスマリア様を無事にランガーナへ連れ帰ることだけに専念するのよ！）

何時の間にか心の醜い部分が私を闇に引きずり込もうとしていた。これが偽りのない正直な気持ちだとすれば、無邪気なまでの寝顔をしているこのお方の死を望む自分が恐ろしくてならない。

本当にカイン王子を想い慕うならば、イスマリア皇女を無事にランガーナにまでお連れする事が私なりの誠意ある伝え方ではないかと自分自身に言い聞かす。

そして二度と愚かな考えが浮かばぬように己を戒め、眠り続ける姫君に心の中で何度も詫びた。

「守れるかではなく、絶対に守るのよ。仮にこの方が偽者のイスマリア皇女だとしても、必ずお守りしなければならぬわ。たとえ私達の命にかえてもね」

その決意を揺るぎないものにする為にも、あえて厳しい言葉を選

んだ。

気持ちが少しでも乱れてしまえば、自分自身が抑えられないような気がしてしまう。

部隊を率いる指揮官が状況把握を誤れば、たちまち全滅してしまふ事もある。

幼き日に父が教えてくれた言葉が不意に頭の中に浮かんだ。

「そうニヤンだけどさあ……このお姫様、ちょっと気にニヤるんだよね」

「気になるって、どういうこと？」

「うーん、ニヤンて言えばいいんだろう。このお姫様からは確かに高い法力みたいニヤものを強く感じニヤれるんだけど、ニヤンか違うんだ。どう言っつていいか分からニヤいけど、とにかくニヤンか違うんだよね」

ミックはイスマリア皇女から何かを感じている様子だ。

アステルベルク皇族は高い法力を代々受け継いでいる家系。

然も^{しか}イスマリア皇女は歴代皇族の中でも群を抜く強い法力を持つお方だと聞く。

だからこそミックはそれを敏感に感じとつたのではないのかと一瞬思ったもの、実際に言おうとしていることは私の考えとは違うようだ。

思ったことを上手く言葉に出来ないもどかさから表情をしかめている。

それは彼女に関して何か大事な事を伝えようとしているのではないだろうか。

「ミックが感じた通りなら、このイスマリア様はもしかすると偽者

かもしれないわね。でも、そんなのどうだっていいじゃない。護衛の任務には何も変わりないんだから」

今ここであれこれ考えても仕方がない。

私達の役目はこのお方を自らの命にかえても必ずお守りするだけだ。

たとえ我々全員が死ぬことになっても、このお方さえ無事にランガーナ城へ辿り着けば役目を果たせる。

勿論、初めから死ぬつもりなんてない。

だって、せめてカイン様の本当の気持ちだけでも確かめたいんだから！

想いを伝えられないのであれば、せめて彼の気持ちがあの日から今も変わってないのかと知りたいのが偽りのない本音。

願わくばカイン王子本人から直接聞きたいと思っている。

その為には自分も生きてイスマリア皇女を連れ帰らなければならぬ。

自分の心と向き合っているうちに、ミックが私の膝の上に乗ってきた。

本物の猫のように丸くなって寝転び、上目遣いに私の顔をまじまじと見つめている。

「そんニヤンでいいの？」

「ウフフ、いいのよ。なるようにしかならないんだから。私はね、このイスマリア様を本物だと思っているわ」

真剣に質問を繰り返してはいるが、動きが怪しい素振りを見せ始める。

やはりだ……。

私の太股を厭らしいまでの手つきで撫で始めると、知らぬ素振り

でじわじわとスカートの中へ潜り込ませようとしてくる。

神聖獣と呼ばれし神の御使いでありながら、類稀なまでの女好きにはつくづく呆れてしまう。

本当に油断も隙もあったものじゃない。

「だって、クスツ……女好きのミックが、イスマリア様に今まで一度もエッチなことが出来なかったからよ。出発前にいくら釘をさしたと言っても、ちょっとばかり不安だったけどね。でも、これで安心して任せられるわ。それとねえ、ミック……」

何事もなかったような笑顔でミックを油断させて頭を撫でた。

そして殺気を隠しながら両手でゆっくりと頭を挟み、両手で頬を撫でたふりをしながら力を込める。

「ニヤ、ニヤにするんだニヤ……！？ フギッ！」

卑猥な表情を浮かべていたミックが苦痛に喘ぎながら恐怖に慄く形相に変わる。

それもその筈。

椅子から立ち上がった拍子に残忍なまでの笑みを浮かべつつ殺気を一気に開放し、ミックの頭を挟み潰さんばかりの力を加えていたからだ。

「い、痛い……痛いニヤ」

ミシミシと頭蓋骨が軋む感触が伝わってくる。

後ろ足をジタバタさせているミックの顔の形が圧迫されて歪み、脂汗が滝のように溢れ流れていた。

「私にこんな事したらどうなるか、まだ分かっていないようねえ。」

この……エロ猫がーあつー!!」

言い終わると同時にミックの頭を挟む両手をそのまま振り下ろし、私の右膝が凶器となって小さな顎を的確に突き上げる。

ゲフツ!!

鈍い音と共に顎が跳ね上がったミックの身体がゆっくりと虚しく空に浮く。

本来なら今の膝蹴りで脳震盪をおこしている状態なのに、この色魔の視線は膝を突き出して露わになった太股に向いている。

まるで煩惱の塊のような厭らしいその目つきが私の怒りに火を注ぐ。

「もつっ！ いい加減に……してよねっ!!」

浮き上がったミックの横顔を力任せに振りかぶった平手が直撃して頬肉にめり込む。

手の平に響く衝撃からして、その手ごたえに間違いはない。

ギャピイツ!!

案の定、鋭い衝撃音と共にミックが短い悲鳴をあげて勢いよく吹き飛んで壁に激突した。

そして壁にへばり付いた身体をピクピクと痙攣させながら床へ静かに落ちていく。

一時的に気絶していたようだが、しばらくして声にならない呻き声で喚きだすと、もんどりうつって苦しみのた打ち回っている。

「ハア……ハア……次やったら、こんなもんじゃ済まないわよ!!
いい、分かった!？」

「わ……かつ、た……ニャ……。もつ……し、しニャい……」

返事を聞いた後は顔を押しさえて蹲るミックに見向きもせず、騒がしい最中でもすやすやと眠るイスマリア皇女について考え始めた。ミックは自分が本能的に感じたことが気になり、彼女が本物なのかと念の為に確認をしたかったのではないだろうか。

静かに眠るこの姫君が本物が偽者なのかは、今ここで詮索をしなくてもランガーナ城に到着すれば分かる事が、それでは遅いとも言いたげな様子だった。

正直に言えば、私だって確かめてみたいと思う気持ちは多少なりともある。

ただ、赤子のように無垢な寝顔で心地よさそうな寝息をたてる彼女からは高貴な血筋を受け継いでいる者が放つ独特な雰囲気を感じ、ミックに本物だと思っていると云った事も偽りのない本音だ。

とても穏やかで温かく、全てを包み込むような慈愛に満ちたものを感じさせるこの人が、どうしても偽者とは思えない。

なによりも神聖獣と呼ばれる存在でありながら女好きのミックがイスマリア皇女に近寄ろうとしなかったのは、法力に気圧されてしまったからではないだろうか。

だからこそ父の命令に反してまで確かめてみたいとは思わなかった。

今の私にはそんなこと事よりも、カイン王子がもつと遠くに離れていくように感じてしまうことの方が怖くて堪らない。

イスマリア皇女との婚礼の話聞いてから今まで何度もカイン王子のことを諦めようと思っても、心が壊れてしまいそんな恐怖を感じてしまう。

それは彼女に対しての妬みだと自覚している。

分かっているからこそ嫉妬に狂いそうな自分が怖い。

一度はイスマリア皇女を無事にランガーナへお連れする事を決意したのに、気持ちがまた揺らいでしまう。

今夜中に気持ちを整理しなければならぬと思いつつ、無意識に唇を噛み締める自分がそこにいた。

月夜の下で 　 Moonlight 　

辺境の小さな町ともなると月光と民家から漏れる僅かな灯りしか辺りを照らすものがなく、遠くを見渡すと暗闇が広がって町全体を包み込んでいる。

夜がしんと更けていくのもあって、たった一人で誰にも見つからないように宿を抜け出した時には民家の灯りが次々と消えていき、見上げれば星々の幻想的な輝きが夜空一面に広がっていた。

まるで自分自身が星々と一緒に静寂な闇に包まれた町の中へ溶け込んでいくように感じてしまう。

それは月明かりを頼りに宛てもなく歩いているからなのだろうか。静かな闇の中で川のせせらぎと虫の声が聞こえる。

気がつけば自然が奏でる音色に導かれるまま、小さな川のためへと足を運んでいた。

川面に照らされた満月が揺らいで見える。

小さな波が映し出した星々の微かな光で色添え、何気にそれを眺めていると少しばかり心が安らんでいくような気がした。

「ミツクったら、ヘンに気を利かしちゃったりして……」

少しぐらいは気晴らしをしてこいと言ったミツクの好意を躊躇ったもの、心の靄を少しでも晴らせるならと思つて甘えることにした。あの時、果たしてペンダントの声との会話が聞こえていたのだろうか。

いや、馬車の中から多少なり心の声が聞こえていても、会話の内容まではつきりと聞こえていない筈。

まさかカイン王子の事を考えながら物思いに耽っていたのが、あからさまに表情に出てしまっていたのだろうか。

理由がどうであつたとしても、それで私に淫らな行為をしようと

した事を反省して気を利かそうとしたのではあるまい。

あんなことは今までに一度や二度ではないし、あれしきのこと
態度をあらためるようなミックではないからだ。

毎度の事ながら、あの筋金入りの女好きには怒りを乗り越して呆
れてしまう。

説教をするのもほとほと言い飽きてしまっぐらいだ。

なのに煩惱の塊のようなミックが気を利かすなんて、何か魂胆が
あるのではないかと疑ってしまう。

「イスマリア様にはへんなことは出来ないと思うし……まあ、せつ
かく気を遣ってもらっているのに疑うのは悪いし、クスッ」

ミックの気遣いを考えていると何故か可笑しく思えた。

今はそんな過ぎたこと深く考えても仕様がなない。

ただ素直に感謝すればいいだけの話だ。

それよりも大事な用を早く済まさなければならぬ。

いざという時が訪れる前に、揺れ動く心の整理を少しでもしなけ
れば、せつかく気を遣ってくれたミックの厚意が無駄になってしまう。

その為にイスマリア皇女の守りを任せてまで外に出たのだ。

心が乱れたままでは自分に課せられた使命が果たせそうになく、
まして感情を抑えたままイスマリア皇女の護衛をするのが辛くて堪
らない。

抱え込んだ葛藤が胸を引き裂かんばかりに心を苦しめてくる。

ならば今のうちに溜め込んでいた感情を吐き出せば、少しでも心
が落ち着くかもしれない。

ここなら誰も見ていないから好きなだけ泣ける。

「カイン様……貴方はいつも、私に何を言おうとしていたの？」

不意に想い人の名前が出てしまう。

目に浮かぶのは何かを言いたげな素振りを見せるカイン王子の顔ばかり。

諦めようとすると燻った理性と想いを伝えたいと叫ぶ本音が私の心の中で今も鬨せめぎあっている。

視界がぶれて目頭が熱くなり、頬に大粒の涙が零れ落ちたのを拭おうとは思わない。

たとえ拭っても溢れ出ようとすると涙を堪えられない気がする。

いや、堪えたくなかった。

「貴方が何も言わなくても、せめて……せめてお慕いしている気持ちだけでもお伝えしたい。なのに、何も言えないなんて……こんな想いをするぐらいなら、こんな家になんか生まれてこなきゃよかった。私なんか、生まれてこなきゃよかったのよお！ うっ、うっ……このまま諦めるなんて嫌……。好きですって、一言だけ伝えられたら私はそれでいいの。たった一言だけなのよ……。だって、仕方がないじゃない、仕様ががないじゃない！ 私はカイン様が好きなので好きで堪らないんだから……あ！！ うっ、うっ……」

押し出された感情のまま、その場に座り込んで顔を伏せてしまった。

止め処もなく涙が溢れ流れてくる。

声を押し殺して嗚咽している今の私は、きつと醜いまでに顔をグシャグシャにして泣いているだろう。

泣いて忘れることが出来るのなら、こんな楽なことはない。

そう思わずにいられなかったその時 背後から何者かが近づいてくる気配を感じた。

咄嗟に涙を拭って背後の気配に意識を集中させると、まるでこちらの様子を伺っているように思える。

それが余計に不気味に感じてならない。

だ、誰だ！？ 一つ……いや、もう一つ小さな足音がする……

妖魔か！？

近づいてくる相手に気取られぬよう身動きをせず、意識を研ぎ澄ませて背後に気を配る。

聞こえてくる足音は一つではない。

二つの足音が歩調を合わせてゆっくりと近づいてくるのがはっきりと分かる。

あまりにも無防備なまでに近づいてくる足音は、妖気どころか殺気すらも感じさせないばかりか、気配をまったく隠そうともしない。

妖魔とは違う。一つは人の足音……この見覚えがある感じ、いったい何者だ！？

感じる二つの気配からして妖魔ではないのは確かだ。

しかし誰が近寄ってくるのか分からなければ気を緩めることは出来ない。

滲み出た冷や汗が頬を伝って落ちる。

一歩ずつ雑草を踏みつけて近づいてくる足音に意識を集中させ、殺気を隠しつつ懐に忍ばせていた短剣を強く握り締めて相手の出方を窺うしかなかった。

「まあ、こんな処ところにいらつしやつたのですね」

語りかけてくる身に覚えのある声に安堵の溜め息が漏れ、短剣から手を放して立ち上がった。

もう一度涙を拭って振り向くと、イスマリア皇女が目の前に立っている。

不安と安堵が入り混じった微笑みを浮かべ、足を止めたまま私を見つめていた。

「イ、イスマリア様、どうしてこのような場所ところに……」

平静を装ってはいるもの、心の中で狼狽うろたしきっていた。

一番見られたくない人に、泣いていた自分を見られたと思うと羞恥を煽られる。

たとえ泣き顔を見られていなかったとしても、嗚咽して肩を揺らしている後ろ姿を見られたのは間違いない。

なぜだか恥ずかしさよりも、悔しさの方がより一層込み上げてくる。

「リアナ様がなかなかお部屋へお戻りになられないものですから、今まで町の中を探しておりましたの」

「お一人で宿の外に出られるなんて、貴女の御身に何かあってはどうされるのです。それに……」

「大丈夫ですわ。お喋りをされるこの猫ちゃんも一緒に一緒ですから」

諷める私の言葉を遮って、イスマリア皇女は自分の足元に視線を向けた。

そこに私も視線を向けると、膝下まである彼女のスカートの中を覗き込もうとしているミックの厭らしい表情がある。

「ミック!!」

咄嗟に声を荒げて叫んでしまった。

大きな怒声がイスマリア皇女の肩をピクリと跳ねさせてしまう。

驚かせたことは申し分けなく思っても、これは彼女の純潔を守る為だ。

そのまま放っておけばミックが調子に乗ってしまう。

これ以上大胆なことをさせてしまえば、どうなるか分かったものではない。

ミックの暴走を阻止するには仕方がなかったのだ。

「あ、あのお……猫ちゃんをあまり怒らないでやって下さい。私が無理に言っただけ外へ出してもらったのですから」

私はミックがイスマリア皇女のスカートの中を覗こうとしたのを怒ったのだが、彼女は勘違いしている様子だ。

ミックが自分をここへ連れて来たのを庇うつもりなのだろう。イスマリア皇女の申し訳なさそうな表情がそれを物語っている。とりあえずこの状況をまったく気がついていなかったのは不幸中の幸いなかもしれない。

「い、いえ……あ、あの、そうではなくて……つまり、そのお……」

ミックがスカートの中を覗こうとしているなんて、純真な心を持っているであろうイスマリア皇女に言えずに口籠もってしまう。

この姫君は男性が女性に対して下心を持っているなど、知らないように思ってしまうからだ。

まして喋る猫が如何わしい気持ちで下着を覗こうとしていたなどと言ってしまうは最後。

おそらく相当なショックを受けてしまわれることだろう。

事実を悟らせないように説明する言葉が見つからずに苛立ちばかりが募る。

どう言えいいのかまったく分からない。

してやったり顔のミックの顔を見ていると余計に腹が立ってしまい、つい鋭い目つきで射抜くように睨みつけてしまう。

ところが厭らしい表情を剥き出しにしているこの煩惱の塊には、些かも効果がなかったようだ。

現に反省するどころか困り果てる私を尻目に、地面を這うような姿勢で下品な顔をスカートの裾の中へと近づけていく。

「無理を言った私が悪いのです。どうか猫ちゃんを、もう許してやって下さいませんか？」

一方のイスマリア皇女は、自分を連れ出したからミックが叱られると思い込んだ様子で表情が沈み込んでしまわれた。

気まずい空気が重く押し掛かってくるように感じてしまう。

もはやこの誤解を解くには、銀毛の猫の姿をしたこの色魔を退散させるしかない。

(このドスケベがっ！)

呟くように呪文の詠唱をしながら指先に魔力を込めると、それを察してミックが必死な形相を浮かべて一目散に走って逃げていく。

イスマリア皇女はこの状況を理解できず、何事かとキョトンとした表情で私とミックが逃げた先を交互に見ている。

私の考えが甘かった。

どうやらミックがイスマリア皇女の法力に気圧されて近づけないとばかりに思い込んでしまっていたようだ。

神聖獣とは思えないあの煩惱の塊は、清らかで強い法力の壁さえもいとも簡単に突破してしまうものらしい。

明日からはミックを馬車の中に入れるのは止めよう。

ある意味で彼女の身に危険が増すだけだ。

そんな事を当の本人が知る筈もない。

いや、知られるわけにはいかなかった。

「猫ちゃん、どうされましたの？」

イスマリア皇女が不思議そうに尋ねてきたのは、突然いなくなったミックが気になったからであろう。

それよりも猫が人の言葉を喋って、よく驚かなかったものだ。

同時に温室育ちの姫君は、それを些かも不思議に思わないのかと呆れてしまった。

おそらく幼子のように純粹で無垢な性格なのだろう。ならば余計にミックが下着を覗こうとしていたなんて教えられない。

この事が万が一にでも厳格な父の耳に届いてしまえば大変なことになる。

あの発情猫にはいい薬になるかもしれないが、ハッキリ言ってもばつちりは勘弁して欲しい。

「まあ、そのお……それよりもイスマリア様、いつまでもここにいるのは危険です。とにかく宿に戻りましょう」

「は、はあ……」

状況が未だに飲み込めずにいるイスマリア皇女は、まだ困惑した表情を浮かべながらも私について来る。

多少強引だったかもしれないが、世間知らずの姫君には下手な誤魔化し方でも通用したようだ。

今まで周囲に何も異変がなかったのを幸いに思いながらも、宿がある方へ足を向ける。

本当なら連れ立って歩きたくなかった。

だが、私の役目を考えればそれは許されない。

それなのに彼女は私の横顔を時折チラリと何度も見て、何かを言いたげな微笑みを浮かべている。

やはり泣いていた私の後ろ姿を見ていたのだろうか。

イスマリア皇女のもどかしそうな表情からして、どうして泣いていたのかと聞きたい素振りに見えてしまう。

たとえ一部始終を見られていたとしても、そんな事を言えるわけがない。

(貴女にだけは、貴女にだけは……死んでも言えるものかつ!!)

時折向けられる視線に気がつかぬふりをしていても、羞恥を煽られてるように感じた心が叫ぶ。

今まで城の外のことを何も知らないまま、性格どころか顔すら見たこともない男ひとの下へ嫁がなければならぬ身の上には同情しても、イスマリア皇女の何か言いたげな表情が私を哀れんでいるかのように見えてならない。

それが我慢できなかつた。

何気なしに見上げると、星々が煌めく夜空が一面に広がっている。その中で一際大きく私達を照らしていた満月が雲に吸い込まれていく。

淡く照らす月明かりが何とも幻想的だ。

草花の爽やかな香りが風に乗って漂い、不思議と苛立った心が落ち着いていく。

こんな風に誰かと一緒に夜空を見上げるのは何時以来だったのだろう。

もし許されるならば、カイン王子とこうして月夜の下を寄り添って歩きたい　そう思いながら夜空をしばらく眺めていた。

「こうしてお顔を見ていると、リアナ様も普通の女の子とお変わりないのですね」

思わぬ言葉に驚いた拍子にイスマリア皇女と目が合ってしまった。

唐突にそんなことを言われても返答の仕様がなない。

何も言えずに狼狽うろたえる私を、目の前の姫君は無邪気なまでの微笑みでじつと見つめている。

その清らかなまでに澄んで美しい瞳に見つめられていると、何故か心が吸い込まれていくような気がしてしまふ。

口を開けばカイン王子に対して秘めた想いを、ありのまま口走ってしまいそうだ。

このお方には何故か心を見透かされているような気がしてしまう。言葉を待ち続ける彼女から顔を背けてしまったのは、本音を喋ってしまふのが怖かっただけなのかもしれない。

「私、何か変なことを言いましたか？」

「い、いえ……け、決して、そのようなことは……」

振り向くとイスマリア皇女は不思議そうに小首をかしげてまだ見つめていた。

彼女にとつては何気もない言葉でも、胸に深く突き刺さる。

濁りのない瞳の前では心を偽ることが出来ず、ただ言葉を濁すしかなかった。

そして僅かな沈黙の後、小さな溜め息を吐いた姫君の足が止まる。真剣な眼差しを向けてきたかと思えば、急に悲しげな表情に変わっていく。

何かを決意したかのようなその瞳が、私の足までも止めてしまふ。

「どうかなされたのですか？」

「いえ、私ではなく、リアナ様のごことが少し気になって……」

「えっ!?!」

立ち止まった理由を訊ねて返ってきた言葉。

あまりにも衝撃が強すぎた。

今から何を言い出すのだろうと意識するあまりに、怖気がこの場から逃げだそうと訴える。

だが、足が地に根を生やしたかのように一步も動かず、悲しげで真っ直ぐな瞳が私の心を掴んで逃がさない。

「なんだか随分とご無理をなさっているように見えますわ。毅然とされているリアナ様は大変凛々しくて頼もしいのですが、何故か本当のご自分を隠してらっしゃるような……。私にはそのように感じ
わたくし
てなりません」

「な、何を言われるのです！ そんなことはありません！ 私は物心がつく前からこんな風に育てられました。ですから、辛いと思っただことは一度もありません。むしろイスマリア様の方が今までお辛いことが多々あったのではないのでしょうか？」

あの事を言われる前に話を逸らそうとして咄嗟に言葉を並べた。

イスマリア皇女もまた私と同じように自由を奪われた身。

それが自分と何処となく重なってしまう。

故にお仕えするカイン王子の下へこれから嫁がれて妃となられるお方に対し、失礼を承知で今まで同情していた気持ちをありのまま伝えた。

「私わたくしが、ですか……？」

自分がそのように思われていたのが意外に思ったのだろうか。

悲しげだったイスマリア皇女の表情が困惑の色に染まっていく。

次の言葉が思い浮かばず、自分の気持ちをどう表現したらいいのか分からないといった様子だ。

「はい、イスマリア様は城内から一度も外へ出られたことがないとお聞きしています。私にはそんな窮屈な生活など、到底耐えられるものではありません。まるで何処かにつっと閉じ込められているよ

うに感じてしまいます。あっ……すみません、どうかご無礼な発言をお許し下さい」

「いえ、構いませんわ、お気になさらないで下さい。確かにずっとお城の外を憧れていましたわ。でも、こうして念願が叶ったわけですから、そうでもないですわよ」

「初めて外に出られたのが、顔も知らない相手に嫁ぐ為なのに……ですか？」

「ええ、それが私の運命であり、幸せでもあるです。ですから、お会いするのが楽しみでなりませんわ」

私には到底考えられないことを、このお方は恥ずかし気もなく頬を赤らめて言つてのける。

まるで恋を夢見る少女みたいだ。

聞いているこちらが気恥ずかしくなってくる。

誰かをまだ好きになったことがないから、こんな言葉を平然とと言えるのだろう。

おそらくイスマリア皇女は一度も恋をしていない筈だ。

そうでも思わなければ、こんな会話に付き合っていられない。

相手の事をよく知って理解し、そこでようやく初めて好きになれるものだと私は思う。

良い所、悪い所、それをひっくり返るめて好きになるのが自然な人の愛し方なのだろうと……。

果たして、顔すら見たこともない男を本当に好きになれるものだろうか。

それで本当に幸せになれるのだろうか。

違う　　！！

人を好きになるって、そんなものではない。

それでは私のカイン王子への想いが否定されたようなものだ。

「そうでしょうか。人は分かり合ってこそ、お互いに思いやる気持ちが生まれ、やがて相手を愛しむものだとは私は思っています。まして顔も知らぬ相手に恋慕の情など、果たして生まれるものなのでしょうか？」

運命の糸がそんなものであつてたまるかと思うあまり、反論せずにはいらなかった。

それはイスマリヤ皇女への嫉妬なのか、それとも純粋にカイン王子を想つて出た言葉なのかはよく分からない。

ただ、私の言つた事の方が正しいと断言できる。

血筋や家柄などのしがらみで、見知らぬ相手に嫁ぐのは女性としてはとても不幸なことだ。

それを疑わずに幸せを感じるなど、異性を心底好きになつたことがない証拠ではないのか。

そう思つていた私の手を、ゆっくりと首を何度か横に振つたイスマリヤ皇女がそつと握り締めてくる。

「それは人それぞれですわ。リアナ様……貴女は今、恋をなさつているみたいですね」

「！？」

やはり、先ほどの事は見られていたようだ。

私の気持ちに気がついているような素振りをまったく見せていなくても、あまりにも衝撃的な発言に胸が締めつけられて言葉が出ない。

泣いていた姿を見ていなければ今の言葉は出てこない筈だと思つあまり、心臓が激しく鼓動して意識をかき乱していく。

「それも身近な殿方のようですね。どのようなお方なのかしら？
リアナ様がお好きになられる方でしたら、きっと素敵な殿方な
でしょうね」

まるで私がカイン王子をお慕いしている事を指摘しているような
口ぶりに、顔がみるみると赤く火照っていくのを感じてしまう。

全身の血液が沸騰しているのではないかと錯覚するぐらいに身体
が熱く感じ、心臓が今にも破裂するかのように激しく脈打って私を
責めたてる。

もう何かを考えることさえ覚束ない。

歩いているのか、それとも立ち止まっているのか、それすらも分
からなくなってしまうていた。

すると突然、イスマリア皇女が握り締める私の手をギュツと強く
握り直してくる。

「ウフフ　ちゃんとご自分の想いを伝えなければダメですわよ」

悪戯っ子のような笑みを向け、誰にも打ち明けたことのないカイ
ン王子への想いを促すようにイスマリア皇女が肩を寄せてくる。

触れ合う肩の温かみが伝わり、激しく動揺する心を優しく包み込
んでくれるかのようだ。

まるで実の母親のようで姉でもあるかのような愛情を、何故かこ
の姫君から感じてしまう。

「胸が張り裂けそうなほどに好きなんですわ。ずっと黙っている
のは相手の殿方にも不幸なことですわ」

昔話に登場するような意地悪なお姫様だったならば、どう言われ
ようが気にもしなかっただろう。

心が激しく揺さぶられることもなく、聖騎士として“心を偽った仮面”を被り続けていた筈だ。

しかし何故かこのお方の言葉は心の奥にまで深く沁み込んでいき、幼かった頃からの呪縛を解き放そうとしてくれているようにも感じてしまう。

何時の間にか自分の立場を忘れてしまい、恋に悩む一人の女に戻ってしまっていた。

それは決してイスマリア皇女の法力によって心を見透かされたわけではない。

彼女が清らかな心の持ち主だからこそ、私の心がごく自然に伝わったように思える。

ならば何もかも打ち明けてしまえば楽になれるだろう。

このお方ならば全てを受け止め、私が歩む道を示してくれるのではないだろうか。

そう思う反面、やはり自分の想いを今日初めてあった女に知られてしまうのが恥ずかしいという気持ち掻き消えず、自分の殻に閉じこもるあまりに押し黙ってしまう。

ましてイスマリア皇女はカイン王子の妃となられるお方だ。

彼女がこれから嫁ぐ男のことを、小さな頃からずっとお慕いしていたなど言える筈もない。

「今度ゆっくりとお話を聞かせて下さいませ。私はいつまでもリアナ様の味方ですから」

その屈託のない笑みは、一体どういう意味をもつのだろう。

触れた肩を押し付け、私に何を言おうとしているのだろうか。

だが、こうして手を繋ぎながら寄り添うように歩くのも悪くない。繋いだ手よりも、肩から伝わるイスマリア皇女の温もりが心地よく感じてしまう。

昂った鼓動が落ち着いていくのが何とも不思議な感じた。

つい今しがたまで激しく心を揺さぶられていたのに、お互いの肩が触れ合ってから安らぎすら感じてしまっている。

唯一の肉親である父にさえ甘えることが許されない私にとって、もしかすればこのお方こそが心から通じ合えて本音を語ることが出来る人ではないのだろうか。

ふと、そんなことが頭に浮かび、しばらくこのままでもいいと思っただ。

妖魔の襲撃 　　R a i d

我々は夜が明けてまもなくランガーナ城へと出発した。

昨夜は宿に戻った後にミックを叱りつけたのは言うまでもない。

今回はかりは流石に反省したような素振りを見せてはいたもの、イスマリア皇女の下着を覗こうとする厭らしい行為を目撃してしまえば、馬車の中から護衛をさせるのは逆に危険を増やしてしまうだけだと思ってしまう。

だが、やはり万が一の事を考えてしまい、ミックには二度とスケベ心を出してはならないと言いつつ、もしも約束を反故にした時の罰を仄めかせて馬車の中からの護衛を任せることにした。

いつもなら声が枯れるまで怒鳴り散らせば気分がすぐに晴れる。

しかし昨夜はイスマリア皇女にミックを叱る理由を知られるわけにいかず、まして再びぐつすりとお休みになられた後も大声を張り上げることが出来なかった。

結局、小声で叱りつけただけで済ましてしまい、心にはまだ燻っているものを感じてしまう。

それとイスマリア皇女から感じたあの心が安らぐ温もり……。

答えを探しても見つからない。

戸惑いと燻っている感情が心の中で絡み合い、自分の気持ちが分からないままランガーナ城へと向かっている。

どうしてあの時だけ、居心地良く感じたんだろう。死んだお母様って、イスマリア様みたいな温かさを感じられる人だったのかなあ。

宿に戻るまでイスマリア皇女と肩を寄せ合って手を繋ぎながら歩いていた時、それまでカイン王子のことで張り裂けんばかりだった心が落ち着いていて、触れた温もりが心地よかった。

とても安らかな気持ちになって、いつまでもこうしていたいって思った。

もしかすれば、心の何処かで甘えたいという心境があつたのかも
しれない。

物心がつく前に亡くなった母の温もりを、恋敵ともいえる女から
無意識のうちに感じ取り、母性としての優しさをこのお方に求めて
いたのだろうか。

イスマリア皇女に自分の切なくて辛い想いを打ち明けたという
願望があつたとするのなら、私はなんて恥知らずなまでの浅ましい
女なのだろう。

まるでカイン王子を譲つて欲しいと言っているみたいだ。

お母様が生きていた時の記憶なんてないのに、イスマリア様の
ことをそんな風に思うなんて、絶対にありえないわ！ ミツクのこ
とでイライラしているだけよ！

自分の醜いまでの嫉妬心を否定しなければ、あまりにも惨めすぎ
る。

そもそも物心がつき始めた頃の記憶にあるは厳格で怖い父と剣技
の稽古に厳しい師匠、それとカイン王子と共に過ごした思い出ばか
り。

他の記憶といえば、髪と瞳の色を好奇心な目で後ろ指を指されてい
たのが辛かったのを覚えているだけ。

母の顔をまつたく覚えていない自分が、よりもよってイスマリ
ア皇女に母性を求めるなど絶対にありえない。

あの頃の私って……

古い記憶を辿っているうちに、まだ幼かった私にカイン王子が言
った「大きくなったら僕のお嫁さんになってくれないか？」という
あの言葉がまた鮮明なまでに蘇ってくる。

そして昨夜泣いていたことが繰り返し浮かんでき、再び胸を
締め付けられて心が激しくかき乱されてしまう。

そうよ、あんなの見られたら恥ずかしくて堪えないじゃない！
泣いていた姿を目撃された挙句、隠し続けた想いまで知られてし
まったと思つて昨夜は眠れなかった。

頭を左右に振って掻き消そうとしても、イスマリア皇女との会話が頭の中で繰り返し浮かぶ。

もうこんなの、嫌だよ……。

この先も惨めな思いをする日々が続くなら、まだ髪や目の色を指摘された方がいいと思えてしまう自分が情けなく感じてしまう。

威風堂々と己を偽っても、幼き頃から抱えているコンプレックスを隠しているだけ。

そう、私は父に叱られるのが嫌なだけではなく、その為に“偽りの仮面”を被り続けている。

決して人前では見せない素の姿をイスマリア皇女の前で晒してしまい、心の中までも覗かれたと思うばかりに意識してしまう。

はああ、今度ゆっくりと聞かせて下さいと言われても……。

表情にこそ出さないもの、自分の心の弱さを隠したいだけなのを自覚しているだけに溜め息が漏れる。

まして心が乱れたままの状態で、馬車の中の姫君を無事にお連れすることが出来るのだろうかと考えてしまう。

こんな私情に流されている私が聖騎士になってしまったことが、なんとも滑稽に思えてならない。

先代の百虎を司る聖騎士が亡くなられて以降しばらく空位になっていたとはいえ、国王は何故未熟な自分を選んだのだろう。

地位や名誉なんて何もいらぬのに……。
ずっと思っていた。

親子二人が百虎と玄武それぞれの聖騎士に選ばれるのがシエルフオート家末代までの誉れだと父は喜んでいたが、私は嬉しいと思っただことなんて一度もない。

今でも辞退すればよかったと後悔している。

普通の女の子として生きたかった。カイン様とお互いの気持ち確かめ合いたい。

何度もそう願った。

身分の違いと立場を考えて、そこから一步も踏み出せない意気地

のない自分をもどかしくてならない。

せめて幼き日のようにずっとカイン王子の傍に居られさえすれば
と思ってしまう私は馬鹿だ。

余計に惨めな思いをするだけなのが分かっているのに……。

『ククク！ 恋敵にあのような事を言われて眠れなんだか。泣いて
おるとこまで見られては、恥ずかしくて堪らないのじゃろう。リア
ナはまだ生娘なのじゃから当然なのかもしれんな。クツ、ククク！』

感傷に浸っていると、ペンダントに付いている真紅のクリスタル
から発する老人のしわがれた声が意地悪な言葉を並べてくる。

どう罵られても凶星を突かれただけに、言い返す気にもなれな
った。

いや、言い返す言葉が何も浮かんでこなかったと言った方が正し
いのもかもしれない。

ただ悔しさを滲ませた怒りをグツと堪え、言葉が止まるのを待つ
しかなかった。

『 イスマリア皇女に言われた通り、カイン王子に好きだと
告白したらどうじゃ。ワシから見てもお前さんはべっぴんじゃ。と
びっきりのいい女じゃよ。戦場を勇猛に駆けるあばずれ女とはとて
も思えんぐらいにな。だからじゃよ、お前さんがおしとやかに告白
してしまえば、そのギャップで案外なるようになるかもしれんぞ。
男とは単純じゃからのう。いつそ、その汚れなき美しい肉体で誘惑
してみるか？ お前さんの肌の温もりと匂いで、コロツと簡単に喰
らいついてくるかもしれんぞ。カイン王子といえども所詮はただの
男。世の男共は皆、女子の肌おしこと匂いには弱いもんじゃからのう。ク
ツ、ククク！』

私だけでなく、カイン王子のことを下卑た言葉で侮辱するのはあ

まりにも酷すぎる。

言いし難い感情が心の中で渦巻き、自分を見失ってしまおうくらいにまで達した怒りで、馬の手綱を引き千切らんばかりに思わず強く握り締めてしまった。

婚礼の儀を控えている現実を顧みれば、想いが遂げられないのはもはや明白。

今更どうなるものではないことを承知で、このペンダントの声は面白半分にからかっているだけなのだ。

本気で言っていないのは分かっている、このような屈辱に黙ったまま耐えられるものではない。

燻っていた感情と相まって、怒りの炎が激しく燃え盛る。

生まれて初めて誰かが憎いと心底思った。

許せない、絶対に許さない！！

今まで髪と瞳の色を指摘されて辛いとは思っても、相手を憎んだことなんて一度もない。

しかし幼少の頃からの想いを踏み躪られただけではなく、愛する人に対して侮蔑とも言える言葉を吐かれては我慢ならなかった。

怒れる感情のまま叫びたいのを堪えなければならぬのが苛立らしい。

お前に私の心が分かってたまるかと叫びたいのを必死に堪え、不意に馬車を見てしまったその時。

もつとも恐れていたことが現実のものになろうとしている。

迂闊にも夥しい数で迫ってくる禍々しい気配に、今まで気がつかなかった。

しまった、妖魔かっ！！

周囲を見渡すと、無数の妖魔と言葉を持たぬ魔物の群れが遠くに見える。

兵達もようやく気がついた様子で、動揺の色が隠せない。

圧倒的な数を前にして表情が強張り、馬の足並みが乱れている。

招かざる者達の群れは前方からだけではない。

四方を取り囲むように接近してくる。
地の底から這い出るような雄叫びをあげ、今まさに我々を襲おう
としていた。

草1本と生えていない荒野を埋め尽くさんばかりに押し寄せてく
る人ざらぬ者達の群れ。

更に上空からも羽が生えた妖魔達が迫っている。

今からでは振り切つて逃げようにも間に合わない。

完全に退路を絶たれてしまったようだ。

この状況で自分一人の身は守れても、イスマリア皇女を傷一つ負
わすことなく切り抜けるのは至難の業。

無数の妖魔の中にひと際大きな妖気を感じてしまえば否応無しに
痛感させられてしまう。

只ならぬこの巨大な妖気こそ“上級妖魔”と呼ばれる畏怖すべき
存在であるのは間違いないだろう。

背筋を駆け抜ける悪寒がそう教えてくれる。

迫り来る者達の目から逃れようと旅の商人に成りすましたことが、
ここにきて裏目となってしまった。

「来るぞ！ よいか、なんとしてもイスマリア様を守れ！ 絶対に
馬車に近づけさせるな！」

そう叫ぶと同時に馬の足を限界まで速めながら兵達にも追従を促
し、姿が見えはじめた異形の者達からの攻撃に備えはじめる。

己の魔力を高め、妖気だけでは掴めない正確な規模を見定めよう
と周囲を見渡す。

イスマリア皇女のこと気がなって馬上から振り返ってみると、
馬車を取り囲んだ馬群が一斉に走り出した為に砂塵が舞い上がり、
乾いた土の雨を降らしていた。

このような時にも思いながらも、行き場のない怒りをぶつけるに
は丁度いい相手なのかもしれないと語りかけてくるもう一人の自分

が
いる。

怒りを一気に開放させるといつも以上に魔力が高まっていく。
だが、自分を見失っていないようだ。

“偽りの仮面”を被りながら冷静に周囲の状況を把握しつつ、次の指示を与えるのも忘れてはいない。

「フィデオとゴーハは私の左後方、クラウスとイトルは右後方にそれぞれ展開。他の者は方円の陣を崩さずにイスマリア様をお守りする。このまま正面を一気に突き破る。私に続けええっ!!」

兵達は指示通りに陣形を組みながら火薬玉を片手に持ち、忍ばせていた短剣を取り出す。

周囲を埋め尽くして迫る妖魔達からイスマリア皇女を守り、尚且つ前方の敵を突き破る陣形は戦闘が始まる前に間に合ったようだ。

「まさかこれ程の数でくるとは！ それにあの大きな妖気……ならば、彼女はやはり!？」

襲撃されるのを想定していたとはいえ、想像を絶する手勢を目の当たりにしてしまえば、馬車の中にいるお方が本物ではないかと確信めいたものが脳裏に浮かぶ。

こちらが本物のイスマリア皇女を守っていると見抜いたからこそ数ではないかと思えてならない。

そうなると父ファンベル達は既に襲撃を受けたかもしれないと一抹の不安がよぎる。

お父様なら大丈夫よ、きつと……

とは思っても、やはり気懸かりでならない。

『今は人の心配をしている暇はないぞ』

胸元のペンダントが言った通り、今はこの窮地を如何に乗り切るかと考えなければならぬ。

しかし魔物を従えた妖魔達全てを撃退するには武装が心許無いばかりか、数にしても戦力の差がありすぎる。

幸いにも巨大に感じた妖気は我々から遠く離れた後方からまだ動いていない。

ならばイスマリア皇女を守り抜くには、前方に立ち塞がる妖魔達を蹴散らしながら一点突破を謀るのが懸命な判断であろう。

いや、他の選択肢など既がない。

現状の速さを維持したまま向きを変えてしまつと馬車がその反動で転倒してしまう。

逆に馬の足を緩めてしまえば四方から一斉に襲われるのが目に見えている。

まだ妖魔と接触していなくとも我々はもはや窮地に立たされており、イスマリア皇女を守り抜く手立てはこの特攻ともいふべき無謀を仕掛けるしか残されていなかった。

『ここはミックを呼び、武甲聖装して一気に退路を切り開くか？』

「いや、それでは妖魔共が馬車に取り付いてしまえばイスマリア様の身が危ない」

『ならばかなり強引かもしれんが』

「ああ、やはりこのまま正面の妖魔共を蹴散らして進むしかないよ
うだ」

『このお転婆め、簡単に言いよるわ』

心へ語りかけてくるしわがれた老人の声も私と同じ考えに至った

ようだ。

本来ならば聖騎士としての力を使いたいところだが、それにはミツクを馬車の中から呼ばなければならぬ。

だがイスマリア皇女をお独りにしては、万が一に妖魔が馬車に取り付いてしまえば攫われてしまう恐れがある。

ミツクを馬車の中に残しているのはそれを防ぐためだ。

「無茶は承知。ならばこそやってみせる」

『やれやれ……それでは益々嫁の貰い手が見つからなくなるというものよ。ファンヴェルがお前さんの旦那を選ぶのも苦労することじやろつて。そう言えば国王も悩みの種だと言っておったのう』

「……………」

呆れたように言い放つペンダントの声を無視して、整った陣形を維持しながら自分の馬を先頭に走らせる。

その後方からは乾いた大地に土煙をたてながら馬車を取り囲んだ兵達も続く。

馬車の車輪が悲鳴をあげているような軋む音が気になっても、今は馬の足を緩めることは出来ない。

イスマリア様、今しばしご辛抱を！

今頃は異形なる者達の咆哮で怯えておられるかもしれない。

下界のことを知らないであろう姫君は、今までに妖魔の恐ろしさを肌で実感したこともないだろう。

その心中を察しながらも、私にはイスマリア皇女の様子を伺う余裕がない。

この場を如何にして切り抜け、妖魔達の追撃を逃れることに専念しなければ取り返しがつかない事態に陥ってしまう危機感がつきまとう。

故に後方に感じる只なぬ妖気が、せめて突破口を切り開くまで動かないのを願うしかない。

妖魔に従う魔物達の群れと相對する距離が縮まり、禍々しい生物の壁が眼前を塞ぐ。

だが、兵達が手に持つ火薬玉を投げても届く距離ではない。

そこへ軟体で形状が定まらない不気味な魔物が、まるで連式の投岩器のように粘液の塊を無差別に吐き出して来る。

幾ら風を切り裂く速さで撃つてきても、見切りさえ間違わなければそう当たるものではない。

まして馬車に直撃しないよう先鋒の我々だけを狙って直線的に飛んでくるのだから避けるのは容易だ。

注意すべきは腐臭を伴う飛び散った粘液の飛沫に触れないことだけで、これなら馬を操って避けながら反撃ができる。

「大地と風の精霊達よ、我が名の下に集い、封印されし古の力を解放して！」

間合いを計りながら呪文を唱えはじめても十分に間に合う。

眼前の魔物はただの足止めに過ぎない。

現にその後方には我々が立ち止まった際に襲いかかろうとしている妖魔達の姿がある。

ならば奴等を蹴散らして突き進むだけだ。

「メテオ・トルネード！」

正面の魔物に狙いを定める右手に集まった魔力が解き放たれると、醜悪な生物の肉体を風の刃が切り裂き、召喚した岩塊が貫いて四散させていく。

そして血飛沫をあげる肉片を掻き混ぜるように渦を巻き、やがて巨大な竜巻となって立ちはだかる数多くの妖魔達を飲み込んでいっ

た。

「巻き込まれるな！ 私に続けええっ！！」

全てを飲み込んだ巨大な竜巻が無数の岩塊すらも持ち上げて上昇していく。

その竜巻を避けながら私達は巻き込まれないように抜ける。

荒れ狂う巨大な竜巻の中では妖魔と魔物達が岩塊に肉を抉り引き裂かれていく。

馬の足を進めながら振り返ってみると、それが血風を巻きおろして猛威を奮い、交じり合った彼等の肉片が付着した岩塊が流星の如く飛び散って大地へと降り注いでいくのが見える。

更に降り注ぐ血の流星群が後方から私達を追ってくる新たな妖魔達を容赦なく襲う。

魔物達を自らの盾にしようとした妖魔もいたが、それが無駄であると分かっている。

血の流星群は魔物達の五体に無数の風穴を開けて飛び散らせる。

妖魔達は断末魔の叫びをあげて己の肉体を散らせていくしかなかった。

逃れられぬ脅威 　　Threat 　　

護衛の兵達が火薬玉を投げつけて上空や左右から迫る妖魔や魔物を爆散させても、イスマリヤ皇女を狙う魔の手は怯むことなく、こちらの足を止めようと躍起になってその凶暴さを増して襲い掛かってくる。

死を恐れずに牙を剥く追撃者の姿を目の当たりにしてしまえば、流石に勇猛で名を馳せたランガーナ王国の兵達といえども大剣や防具なしでは、やはりその表情に動揺の色は隠せない。

せめて弓などの飛び道具があればという声が聞こえてきそうだ。

「リアナ様、このままでは！」

「分かってる！　臆するな、このまま走れ！」

魔物と接近して相対するだけでも、殺傷力が乏しい短剣だけでは心細いと言いかげない。

まして尋常ならざる生命力を誇る妖魔が相手となれば尚更だ。

火薬玉が使える離れた距離ならまだしも、心臓の位置が個々で違えばかりか多少の傷ならばすぐに傷が癒えてしまう為に、本来なら十分な装備が必要となる。

また、人間なら致命傷となる傷でも必ずそうだとは限らない。

故に一振りの短刀だけで妖魔と戦うとなれば、初手で唯一急所だと分かる頭部だけに狙いを定めて仕留めるしかない。

一撃で急所を貫かねば手痛い反撃を受けてしまうことを物語るように、左斜め後方から兵の叫び声が聞こえた。

振り返ると蛇頭の妖魔が鋭い爪で若い兵の胸を切り裂き、今にも馬車へ飛び掛からんとしている。

「フィデオ！！ くっ！」

叫ぶと同時に足場の悪い馬上から後方へと鞍くを蹴って飛び跳ねた。イスマリア皇女が乗っている馬車に蛇頭の妖魔が取り付く前に空中で背後から取り押さえ、逆手に握り直した短剣でそのまま一気に頭部を刺し貫く。

そして地上に叩きつけられる前に息絶えたその妖魔の背を蹴って空を舞い、異形の魔物が鋭い牙を剥き出しにして頭を噛み砕かんばかりに襲い掛かってくるのを避けながら斬りつける。

交差した魔物が側頭部から血飛沫を散らしたのは自分が乗っていた馬に着地した時だった。

断末魔の雄叫びをあげて倒れていく姿の真横を駆け抜け、眼前から迫り来る妖魔を逆手に持ったままの短刀で薙ぎ倒して凌ぐ。

一呼吸をする間すら与えてくれない妖魔達の波状攻撃。

奴等は狡猾にも今度は我々が駆る馬を狙って足を止め、防御の壁を剥いでいくつもりのようなうだ。

鞭むちのように撓しなった腕が馬体に迫る。

それを上半身だけ横倒にして、腰を捻ったまま刀身で鋭利で爪のような先端を弾き、ブーツに仕込んでいた細長いナイフを即座に放つ。

眉間を刺された妖魔は追ってこない。

しかし背後からまた兵の悲鳴が耳に届く。

「クラウス！」

馬を殺されて転がり落ちた兵を助けることが出来ない。

逃走の足を止めることが出来ない現状では、遠く離れた場所から聞こえた彼の死を告げる叫び声を聞くしかなかった。

その間にも前方へ回りこんだ妖魔が我々の行く手を遮って襲い掛かってくる。

魔法で今度こそ退路を切り開こうにも、応戦中の最中では呪文を詠唱する僅かな時間を与えてもらえず、四方から迫る敵を各々が一体ずつ倒していくしか今の我々には打つ手がない。

本当なら馬の足を更に速めたいところだが、馬車の車輪は限界だと言わんばかりの軋む音を響かせて走っている。

車体の激しい物音からして、中はかなりの衝撃を伴った揺れを引き起こしていることだろう。

イスマリア皇女が怪我を負っていないかと気になっても、今の私にはそれに構う余裕がない。

前方には待ち伏せていた妖魔と魔物の群れが待ち構えている。

我々が強行突破を謀ろうとしたのを見抜かれては動揺を隠すことも出来ず、もはや“自分を偽る仮面”すら被っていられない。

『このままじゃ保たんぞ！ いずれ数で押し潰される。やはりミツクを呼んだ方がよいのではないのか？』

「ダメよ、イスマリア様をおひとりには出来ない！」

ペンダントの声言いたいことは分かっている。

それは聖騎士としての力を解放し、この窮地を乗り切ろうと訴えているのだ。

しかしミツクを呼ぶということは、万が一にも妖魔達が馬車に取り付いてしまえばイスマリア皇女の身が危うくなる。

妖魔の殲滅を優先させるならまだしも、彼女を無防備に曝してしまふことだけは避けたかった。

『なら、どうするのじゃ？ 前のアレを突破するのは容易ではないぞ』

「そんなの分かってるわよ！ ちゃんと考えているから黙って！」

言い終える前に私は既に行動していた。

後方の兵と馬の足並みを合わせて頷くと私の意図を分かってくれたのか、自分の馬を前に走らせて盾になってくれる。

その動きを悟った他の兵達も馬車と一緒に周りを囲んで盾になってくれた。

今まで共に死線を潜り抜けた仲間だからこそ、無言で意思の疎通が出来たのだ。

呪文を詠唱する為の僅か数秒の時間稼ぎを彼等は命がけて作ろうとしてくれている。

ここで誰かが持ち堪えなければ、無防備な状態の私も妖魔達の餌食となってしまうだろう。

まさに生きるか死ぬかの賭けだった。

意識を集中させると身体からだが光り輝いて差し出した両手の先に魔力が集中していく。

やがて全身を包むその光が重ね合わせた両手に集まり、手の平に集めた魔力と混じり合う。

周囲では火薬玉が炸裂したであろう爆発音と共に、金属が何かとぶつかって弾ける音や禍々しい叫び声が大地に鳴り響く。

僅か数秒の時間がとても長く感じた。

「みんな下がって!!」

前方で盾になってくれていた兵達が左右に展開すると目の前に妖魔の姿が飛び込んでくる。

その凶暴なまでの双眸が私を捉えて逃がさない。

手に持った禍々しい形状をした槍のようなもので、この胸を刺し貫こうとしている。

「ハアアアアッ!!」

気合と共に両の手の平を重ね合わせた先から放った閃光が眼前に迫った妖魔を消滅させ、扇状に広がる輝きは幾多の魔物達までも飲み込んでいく。

目が眩むほどの輝きが消え去る頃には、前方を塞ぐ人ざらぬ者達の姿は跡形もなく消滅していた。

『無茶をしおつて。これでお前さんの寿命は確実に1年は縮んだわい』

ペンダントの声が呆れて言ったのも無理はない。

今使った魔法は己の命のを触媒に魔力を放出させる属性を持たぬ消滅魔法。

もしも術者がこの魔法の制御を誤ってしまえば、一国をも消滅させてしまう。

その場合は術者の肉体だけではなく、その魂すらも消し去ってしまうと伝えられている

遙か遠い時代にこの魔法が原因で一つの国が滅んでしまったことがあり、それ以降は使ってはならないと戒められていた故に禁呪と呼ばれていた。

但し、聖騎士になった者だけがそれを伝承し続けることをランガン王国に認められ、妖魔との戦いの場合だけに使用を許されている。

ただ、この魔法は使用するだけで寿命が縮み、威力を高めれば高めるほど自分の命が多く削られてしまう為にそう何度も仕えない。

この危機を乗り切る為とはいえ、やはり寿命が縮むというのは嫌なものだ。

それに体力も消費して息が乱れる。

「ハア、ハア……こうでもしなきゃ、全滅は必至だったわ。でも、

これで今度こそ突破口が見えた！」

扇状に抉られた大地に先に僅かならも希望の光が見える。

しかし、これで妖魔達の襲撃から逃れたわけではない。

上空から悪魔のような翼を生やした妖魔が、今までに何度も急降下して無防備な頭上から襲ってくる。

更に左右からは絶えずイスマリア皇女の馬車を狙われ、後方からは一度振り切った妖魔や魔物達が迫りつつあり、危機的な状況には何一つ変わらない。

遠くに見える森に逃げ込めば多少なりとも状況が変わるかもしれないが、そこまで耐え凌げるかどうか言えば、難しいとしか言えないだろう。

後は妖魔達が諦めるか、それとも援軍が駆けつけてくれるかという当てにならない希望に^{すが}縋るしかなかった。

『リアナ、上じゃ!!』

しわがれた老人の声が叫んだ。

その声に反応するかの如く馬上から飛び跳ねて空を舞い、短剣を逆手に持って降下する追撃者を捉える。

妖魔の翼を掴んでみたもの、不安定な体勢では頭部に狙いを定めることが出来ない。

空中で纏れ合うように小さな弧を描きながら降下していく。

「くっ、ええいつ！」

振り下ろした短剣は皮膚が厚い背中を貫いていた。

甲高い悲鳴をあげる妖魔の背に飛び乗って短い刃を引き抜き、躊躇なくとどめの一撃を頭部に加える。

これがもし人間ならば、ここまで冷酷に徹することは出来ないだ

ろう。

刃から伝わる感触が気味悪く感じてしまう。

幼少の頃から戦う術を五体に刻み込まれたとはいえ、これだけは今になっても慣れない。

だが、そんな感傷に浸っている暇はない。

上空から迫る妖魔は他にもいたのだ。

地上の妖魔や魔物は兵達に任せようと咄嗟に判断し、息絶えた妖魔の頭部から短剣を引き抜いて血まみれの背中を飛び台にして跳ねる。

視界の中には怪鳥とも呼べる魔物の姿までもあり、空は完全に異形の者達によつて支配されていたが。

「ライヴォルトー！！」

一体の妖魔と交差した直後、呪文の詠唱は既に終わっていた。

雨のように降り注ぐ雷の槍が妖魔や魔物達を次々に刺し貫いてく。胸を串刺した雷の槍が肉を焼き、黒焦げになった屍の群れが力無く落下していった。

だが、即死から免れた妖魔が私を道連れにしようと腰にしがみつき、イスマリヤ皇女が乗る馬車へと急降下させていく。

今からとどめを刺して方向を変える余裕はない。

妖魔は最後の力を絞って降下する速度を上げているからだ。

死を目前にした異形の者は、本来の目的を忘れたらしい。

このままでは馬車に激突してしまう！ でも、このまま落ちてしまえば……

私の中にどす黒い感情が急に芽生え、まだ燻っている嫉妬心を煽ってくる。

まるで心の奥底に潜む悪魔が囁きかけているみたいだ。

その誘惑に感情が流されそうになるのを懸命に引き止める。

どうやら私は己の欲望で心を悪魔に売ってしまう愚かな女ではな

かったようだ。

いや、イスマリア皇女の純粋な心ともいうべき温もりが、まだ手に残っていたように感じていたから誘惑に打ち勝てたのかもしれない。

「まだ、諦めてたまるものかつ?!」

短剣を両手に持ち直して妖魔の頭部を脳天から一気に刺し貫き、せめて馬車への直撃だけは避けようと息絶えた妖魔の片羽を折り曲げて方向転換を試みた。

私とて聖騎士と呼ばれし者だ。

むざむざとイスマリア皇女を殺されるわけにはいかない。

所詮は無駄な足掻きだとしても諦めたくはなかった。

もしも奇跡というものがあるのなら、それに賭けてみたい。

神と呼ばれる存在に、自分の命を引き換えにしてもいいと必死に願った。

しかし私の願いは届かず、馬車の目前にまで落下している。もはやこの魂の抜けた妖魔の思惑通りになるうとしていた。

「そんな、間に合わない……よ、避けてー！ーっ!!」

絶望してしまうあまりに思わず目をつぶって叫んでしまった。

背中に強い衝撃を受けた反動で身体が跳ね上がる。

ところが浮いた直後に股座を押し上げられただけで痛みは感じない。

柔らかい毛触りと温もりが手の平と臀部に伝わっていることから、何かの上に跨っている状況だけは理解できた。

この毛触りって……

恐々と目を開いた先に、何事も無かったように走り続けている馬車があつて安堵の溜め息を漏らしてしまう。

どうやら馬車から飛び出したミックが本来の白い翼が生えた猛獣の如き姿に戻り、飛び跳ねた勢いで妖魔に体当たりした刹那に私を自分の背中に乗せて助けてくれたようだ。

あと一瞬でも遅れていれば激突していたかもしれない。

ミックの咄嗟の判断が、私とイスマリア皇女を死の窮地から救ってくれた。

「ふうう、間一髪だったニヤ」

「ミック、ありがとう！ 助かったわ」

「これで昨日の事はもう怒らニヤいでよ。怒ったら、またお風呂を覗いてやるニヤン」

「バ、バカ！ もう、こんな時でもエツチなんだから！」

ミックが白々しく長い尻尾でスカートを捲り、肌を露出させた無防備の太股を撫でてくる。

しかし妖魔の追撃は依然衰えず、ここを凌ぎきるまで叱りつける時間すら惜しいために頭を小突くしかなかった。

「イテツ！ 別に殴んニヤくても……」

「知らない！」

想像していた以上の手勢の前で、今は頬を染めて恥ずかしがっている場合ではない。

あまりにも彼^{ひが}我的戦力差があり過ぎる。

このままでは兵達の命だけではなく、イスマリア皇女の身も危ない。

眼下では姫君を守る兵達の火薬玉が底を尽き、たつた一振りの短剣を武器に妖魔の攻撃を必死なまでの形相で耐えている。

もはや私の魔法で切り抜けられるものではなく、残された手段はただ一つだけになったようだ。

イスマリア皇女の身が危うくなるかもしれないが、ここは冷酷なまでの追撃者達を殲滅させるしか切り抜ける道がない。

「ミック、ちょっと何時まで触ってんのよ、このバカ、エッチ！
こうなったら“武甲聖装”するしかないわ。コラッ、もういい加減にしてよねっ！」

聖騎士と呼ばれし者だけが秘める大いなる力を、今ここで使う刻が訪れたのだ。

執拗に太股を撫でるミックの尾を手で払い、胸元を飾るペンダントを握り締める。

だが　！！

『コリヤ、お前達！　はよ意識を集中させんかつ！』

「わ、分かってるわよ！」

「あゝあ、こんニヤ触り放題ニヤんてチャンス、もう二度とニヤいかもしれニヤいのに……」

『この馬鹿もんがつ！　そんなに触りたいのなら、尻でも胸じゃろうが後で幾らでも好きなだけ触ればいいじゃろっ！』

「なっ、なんですすって！！　あ……　ああ……　そうだ、あの時も……」

真紅のクリスタルが輝きはじめたペンダントを握り締めていた最

中、力を解放させようと集中させていた意識が掻き乱され、全ての刻ときが止まったように感じた。

しわがれた老人の声がミックを諫めた今の言葉と、不意に思い出した妖魔の襲撃を受ける直前の言葉が何故か重なっていく。

そうよ、さっきもお前は私の……そればかりかカイン様のことまで……！！

沸々と言いきり難い怒りが込み上げていく。

想いを踏み躪るような言い草だったあの時の言葉がもう我慢できない。

私だけでなく、カイン王子まで侮蔑したのが許せなかった。

この場を切り抜けられる唯一の方法は封印されし力を解放させるしか残されていないと頭では理解していても、心がそれを使いたくないと拒絶してしまう。

そして握り締めるペンダントをゆっくりと手放してしまった。

「い、嫌……やっぱり私、使いたくない。絶対に、絶対にやだっ！」

力を使う意思を失った直後から、輝きはじめてたクリスタルの光が徐々に弱まっていく。

ミックの背中に跨ったまま、イスマリア皇女を巡る攻防をただ上空から眺めている自分がいた。

ほんの数秒なのか、数分なのかは分からない。

ただ怒りに我を忘れて少しばかり記憶が飛んでいたように感じています。

それは思考が止まっていたと言った方が正しいのかもしれない。

「くっ！ させるものかつ！」

自分でもよく分からないまま叫び、イスマリア皇女が乗る馬車に取りつこうとする妖魔目掛けてミックの背中から飛び降りていた。

短剣で斬りつけながら馬車の屋根に着地したのと同時にしゃがんだ姿勢のまま見上げると、妖魔の肩から横腹を切り裂いている。足元が覚束ない妖魔がバランスを崩して血飛沫をあげながら車体の後方へ落下していく。

その見据えた先に妖魔が魔物達を従えて追いつがろうと馬車に近づく姿があった。

「ヘステイアソヴオレ……ディリユール！！ 火の精霊達に我、今ここに求めるなり。エリシフォーレへの聖道を開き、女神ウエスタリアが灯せし神火をもつて不浄なる者を全て焼き尽くせ！」

気がつけば今度は意識に関係なく呪文を詠唱していた。修行で刻み込まれた知識と技が心を見捨て無視して衝き動かしていく。

「フレイマデーイー、ストリーイム！」

召喚した爆炎がうねりをあげて妖魔や魔物達だけを襲う。

そして人ざらぬ者達だけを聖なる炎が飲み込み、濁流の如く荒れ狂って焼き尽くしていく。

だが、まだ無数の妖魔や魔物達が執拗に馬車を狙っている。

この魔法は著しく魔力を消費する為にそう何度も放てるものではない。

たとえ他の魔法で妖魔達に立ち向かっても、倒しきるまでに魔力が底をつくのは目に見えている。

それなのに自分の秘めた本当の力を使うのを頑なに拒絶してしまう。

まるで自分自身が別人のように意識が切り離された気がしてならない。

私は今、何の為に戦っているんだろう……。

怒りの感情だけが先走って魔力を暴走させ、無駄に消費させよう

としている。

短い刃で相手を切りつけながら魔法を放つ自分がまるで他人のようだ。

身体だけが勝手に動き、心が誰もいない場所で独りになりたがっている。

私、こんな辛い思いをしてまでどうして戦っているんだろう？
だったら、いつそのこと……。

頭ではこの状況を分かっているのに大切な何かを思い出せない。
ここで妖魔に殺されてもいいとさえ思ってしまうぐらいに、自分でもう一人の自分を冷静に見ている。

『リアナ、何をしておる。早く武甲聖装するんじゃ！ オイ、どうしたんじゃ、早くせぬか！』

しわがれた老人の声が私に聖騎士の力を使えと叫んで急^せかす。
何度となく呼びかけてきても応じる気にはなれない。
声を聞くと心が壊れそうぐらいに怒りの炎が滾ってくる。

「リアナア、どうしたんニヤ？」

一つ目の禍々しい巨大な魔物と対峙しているミックが心配そうに見ていた。

この窮地を脱する為には私とミック、それにクリスタルのペンダントが三位一体となった姿になるしか術がないのは十分に分かっている。

しかし心を傷つけられてしまえば、武甲聖装などする気になんてなれない。

大切にしていた想いとカイン王子を侮辱した言葉が許せず、ペンダントと一つになりたくなかった。

「ハア、ハア……だ、黙れ！！ 武甲聖装などしなくても、これしきの妖魔の手勢ならば、私の力だけでも切り抜けてみせる！」

ペンダントが発する声を聞いているだけで、余計に意地を張って怒りに駆られてしまう。

闇雲に魔法を放ち続けても妖魔の猛追を逃れることが不可能だと分かっていても、意固地なまでの感情が暴走してしまい、次々と倒されていく兵達の姿に今まで気がついていなかった。

自分の取った行動が如何に愚かな行為だったと気がつくのが遅かった。

ある兵士は首を跳ねられ、またある者は落馬した直後に魔物の牙に襲われて壮絶な最期を迎えていた。

馬上で事切れた五体を裂かれた者や、全身に無数の風穴を開けられた兵士達の屍がその凄惨さを物語っている。

最後まで生き残っていた馬車の手綱を握っている兵が転がり落ちる様が目に入り、彼が魔物に食い千切れていく最期が目焼きつく。私はようやく自分自身を今まで見失っていたことを自覚することが出来た。

そしてイスマリア皇女を守らなければならないというカイン王子から与えられた使命が、今になってようやく蘇ってくる。

私のせいだ……大切な兵を……仲間を……

兵達を指揮する立場の者が冷静さを失って状況判断を誤れば部隊を破滅に招くと父に散々言われたのに、私はむざむざと兵士達を死なしてしまった。

殺された兵士達は日頃から気心が知れていた者達ばかりだ。

自分の部下というよりも、共に笑って泣いた大切な仲間だった。

その彼等の死を無駄にしない為にも、ここでイスマリア皇女だけは守り通さねばならない。

しかし、ペンダントの言葉への怒りと妖魔達への憎しみが、私を感情のままに突き動かしてしまう。

「もうダメだよ……。リアナ、早くオイラ達と……。リアナアアツ
！！」

弱音を吐いているミックも数え切れない数の妖魔や魔物を倒した

ことで、いつもの俊敏性を失って動きが鈍い。

鋭く尖った牙を剥き出しに雄叫びをあげ、刃のように尖らせた豪爪で妖魔を切り裂くと、鋭い牙で魔物を食い破った後に馬車の屋根へ降り立ってきた。

乱れた息を吐きながら必死の抵抗を続けている姿に構わず、呪文を唱えると妖魔達に目掛けて魔法を闇雲に放つ。

無茶な戦い方をすれば魔力が忽ちたちまに底をついてしまつのが分かつていても、そうせずにはいられない。

みんな、許して……私の所為せいで死なせてしまつて……。せめて、せめてみんなの仇だけでも討ちたかつたけど……もう、そもいかないみたい。だったら……！

無我夢中に魔法を使いすぎた結果、身体が鉛のように重たく感じてしまう。

膝が震えて笑い、折れてしまつのを堪えながら立っているだけの有り様。

体力を著しく消耗して立っているだけでも辛く、呼吸すら満足に出来なくて思うように動けない。

もはや生き残っているのは戦う力を失いつつある私とミック、それと命を賭しても守らなければならぬイスマリア皇女のみ。

この危機を乗り切ることが出来る唯一の力を拒んでしまつた今、たとえこのまま最後まで抗つても事態を好転させる術がない。

いずれ私とミックは力尽き、妖魔や魔物達の餌食となつてしまつ。息絶えた後も引き裂かれた五体は骨までしゃぶりつくされ、おそらく髪の毛一本も残るまい。

そしてランガーナ王妃となられる姫君も妖魔の糧として捕らわれた末に、恐怖と苦痛の中で体液と法力を吸い尽くされしまい、骨と皮膚かわだけの無残な姿になつてしまわれるだろう。

生きる気力を失ってしまった今、頬に一滴の涙が伝い、絶望だけが広がっていく。

「カイン様、イスマリア様をお守りする使命、どうやら果たせそうにないようです。お預かりした大切な兵達も皆殺されてしまい、本当に申し訳ありません。ならば、この命をもって責任を取りとうございます。どうか、どうかこの愚かなリアナをお許しください」

死んでいった仲間の仇も討てず、イスマリア皇女を守れないのであればと覚悟を決めた。

愚かな自分に今できることはただ一つ。
この命尽き果てるまで戦い、死をもってその責任を取るしかない。

『そうか！ さっきワシが言ったのをまだ根に持っておったんじゃな。あれぐらいでヘソを曲げおつて、この馬鹿もんが！ 後でいくらでも謝つてやるわい！ とにかく今は早く武甲聖装するんじゃ！ このまま見す見すイスマリア皇女を死なせてしまつつもりか！！ おい、聞いておるのか！？』

頑なに武甲聖装を拒絶した原因に、ペンダントが発する老人の声はようやく気がついたようだ。

しかし今更そんな事を言われても受け入れられない。

幼い頃から大切にしていた想いを踏み躪られただけでなく、そのカイン王子まで侮辱されて私の心は深く傷ついてしまった。

そんなことは分かっている！ だからお願い、このまま死ぬまで戦わせて……

ただ単に私情に流されているだけなのは十分に分かっている。

故にこのような事態を招いたことに対する責任を命で償おうと思つた。

そこへイスマリア皇女の名を出されてしまい、その名が心に引っ掛かつて思考がまた止まってしまう。

唱えていた詠唱を中断してしまい、手に集中させていた魔力が拡散していく。

そこへ巨大な妖気を感じた。
想像を絶する強い力が遙くから風の流れを乱しながら迫っている。

「あ……あれは!？」

禍々しいまでの黒く巨大な光の玉が見えて鳥肌がたつ。
今まで感じたこともない妖気を宿しているのが肌を通じて分かる。
その軌道からして私とミックだけを飲み込むつもりだ。
襲撃を受けた時から感じていた巨大な妖気を放つ者の目論見通り、
たとえ馬車の屋根が消し飛んでも車体は残る。

「は、早く武甲聖装するニヤッ!」

「私に構わずミックは逃げてええーっ!!」

恐るべき力を秘めた妖魔がイスマリア皇女を悠々と連れ去っていき光景が浮かぶ。

もはや巨大な死の玉を跳ね返す魔力が残されていない。

まして今から飛び跳ねて避ける体力すらもなく、両膝について叫ぶしかなかった。

カイン様……こんな私でも、死んだら少しは悲しんでくれますか……。

自分の死の予兆を感じる。

眼前に迫る黒い弾道が過ぎ去った後には、私が生きていた痕跡は失われてしまっただろう。

この身体を血の一滴まで残さずにしてすべて消滅させてしまう筈。

ならば、せめてミックだけでも避けて助かって欲しいと最後に願うしかない。

イスマリア皇女を連れて逃げ切ってくれるかもしれないという微

かな希望と共に……。

「くっ……!!」

歯を食いしばって身体を硬直させ、最期の刻ときを迎えるつもりだったが、既に巨大な黒い玉が過ぎ去った筈なのに何も起きない。

温かい何かだけを感じる。

私……まだ生きているの!?

恐々としながら目を開いてみると、妖魔が放ったであろう黒く巨大な光の玉は既に弾き消され、馬車の中から発せられた光が私達までも包み込んでいた。

今も容赦なく襲う黒く巨大な光の玉を、その温かさをもった優しい光が何度も弾いて消し去ってくれる。

「こ、これは!? この光……まさか、イスマリア様が!？」

この慈愛に満ちた安らかな輝きこそが、魔力と対なる力ともいうべきアステルベルク皇家の血を受け継ぐ者だけが扱える“法力”と呼ばれし聖なる力なのだろうか。

私達ごと馬車を包み込む輝きが心に安らぎを与えてくれるように感じてしまう。

底をつきかけていた体力が僅かながらも回復していくのが分かる。邪悪なるものを退け、心身に癒しを与えるこの力。

本来なら私達が守らなければならないイスマリア皇女が、皮肉にもこの危機的な状況で逆に私達を守ってくれていたようだ。

「私の法力わたくしちからはそう長くは保ちません。リアナ様、どうか今はご自分が生き延びることだけをお考え下さい。貴女には、想い人に伝えなければならぬ大切な言葉があるのでしよう。だったら貴女はまだ、死んではならないのです。さあ、生きる為の力を今ここで……。リ

アナ様の想いをその方に伝える為に使って下さい。だから、早く！」

イスマリヤ皇女の声が聞こえずとも心に響いてくる。

いつもの優しいまでの穏やかな口調ではなく、ご自分の意思を伝えようとする力強い言葉が確かに聞こえた。

法力が弱まっているのか、私達を包む光が少しずつ霞んでいく。

黒く巨大な光の玉がついには押し込み、その衝撃で馬車を弾き飛ばしてしまう。

馬車の外装が崩れて乱れ飛び、イスマリヤ皇女が弾き出された姿が目に見え込んでくる。

咄嗟にイスマリヤ皇女を守ろうと抱きかかえたもの、僅かに回復した今の体力では自分の身体で彼女を庇うことしか出来ず、飛び散った破片もろとも地面に叩きつけられるしかなかった。

傷だらけの全身に激痛が走る。

だが、それは自分がまだ生きている証だ。

「イ、イスマリヤ、さま……お怪我は!？」

痛みを堪えてイスマリヤ皇女を抱き起こしてみると、多少の擦傷はあっても大きな怪我はされていないようだ。

だが法力を使い過ぎた為なのか、目の下に隈がくつきりと浮かび上がり、呼吸が満足に出来ずに息が乱れている。

酷く衰弱なさっている様子からして、かなり深刻な容態であるのは間違いない。

「わ……わた、くしは……だ、大丈夫です……。そ、それよりも……リアナ様の……お怪我の……ほうが……。血が、こんなに……」

苦しげな表情で見つめるイスマリヤ皇女の言葉が胸の奥にまで響く。

このお方は一言も責めの言葉を口にせず、自分よりも傷だらけの私の身を案じてくれている。

熱いものが込み上げて、思わず彼女を強く抱きしめてしまった。

貴女は一国の皇女であり、ゆくゆくは我が国の王となるカイン王子の妃となられるお方なのに。

言葉が声にならない。

心優しい姫君の言葉が意固地になった心を震わしてくれる。

仲間を見殺しにしてしまい、貴女までも危険な目に合わせた私などに……。自分のことを気にもとめず、貴女に嫉妬し、拳句に自分を見失うような私なんかの身を案じるなんて！

胸を打たれ、熱くなった目頭からとめどもなく溢れる涙が止まらない。

自分が如何に愚かだったと痛感させられる。

どうにか心優しい姫君だけでも助けたいという一心が、傷つき疲弊しきつた身体に鞭を打つ。

そしてイスマリア皇女を抱きかかえながら立ち上がったその時。

黒く巨大な光の玉を放っていたであろう大きな妖気を持った一人の妖魔が私達の前に悠然と現れた。

鋭く尖った眼や長い耳が悪魔のような風貌をしているもの、他の妖魔達とは違って人間に近い身体つきをしている。

風になびく紅いマントと貴族のような衣装を身に纏って剣を腰に携えているその姿は、どこか落ち着いた佇まいを見せていた。

「フツ、フハハハー……ッ！ これはこれは、噂に名高いランガーナの聖騎士殿とお会いできるとは光栄ですね。すると貴女が抱いておられるのが、本物のイスマリア皇女というわけですか」

「だったらどうだというのだ!？」

ジエグニーと名乗った妖魔は睨みつける私に対して勝ち誇っている。

見下して高笑う様は勝利を確信したからであろうが、それは油断から生じる隙以外の何ものでもない。

そこにこの窮地を脱する術が残されていると信じて賭けに打って出る。

「そう思惑通りにいくものか！」

残された僅かな魔力を弾けさして妖魔達の目を眩ませる。

唯一ともいえるこの好機を逃さまいとすかさずイスマリア皇女を抱いたまま立ち上がり、ミックと共に怯んだ隙について妖魔達の目から一時的に逃れることが出来た。

そして大きな岩影に身を隠して様子を伺いつつ、イスマリア皇女をそつと寝かせる。

呼吸が酷く乱れて苦しまれる姿が心配でならない。

ミックも同じ思いで横たわるイスマリア皇女に目を向けている。

「早く治療しニヤいと！」

「今治療しても妖魔に見つかってしまえば、それこそ取り返しがつかなくなるわ。だから放っておけないのは分かるけど、今は妖魔達を倒す方が先よ。早くアイツ等をやっつけて、それから治療しても間に合うと思うから」

自分が言った言葉に自信はない。

ましてイスマリア皇女の容態にミックの治癒魔法自体が効くのか定かではない以上、この場を切り抜けることを優先させるべきではないかと思った。

妖魔達の目を眩ませたといっても、それは一時凌ぎに過ぎない。

岩陰に隠れているのが見つかってしまうのは時間の問題であるが故に、この場から離れなければならないのが身を引き裂かれる思いに駆られてしまいながらも、既に心の中には確固たる意思が存在していた。

「姫様、大丈夫だよよね、死なニヤいよね？」

「うん、大丈夫。だから、もういい……」

お互いの意思を確かめ合うと横たわる姫君に向かって一度だけふり返り、岩の頂に飛び上がって眼下を見下ろす。

そこにはようやく目眩ましから視界を取り戻しつつある妖魔達の姿があった。

獲物を探し回っている殺戮者を睨みつけ、胸元のペンダントを右手で力強く握り締める。

「さっきの言葉を許したわけではないが、今はこの窮地を脱するのが先決だ。だから、力を使うぞ」

私の声に応えるかのように、ペンダントに埋め込まれた真紅のクリスタルが淡く輝きはじめる。

この揺るぎない意思がペンダントに伝わり、ミツクの銀毛までも白銀に輝かせてしまう。

魔力や法力とは違うこの聖なる光こそ大いなる力の源。
天の守護神と崇められる四神、西方を司る百虎の力を秘めし輝き、それが今、聖なる衣と刃となってこの身に宿ろうとしている。

「フッフ、あの小娘、最後の足掻きと言わんばかりに手を焼かしてくれるのではないですか。ん、なんですかこの光は!？」

妖魔ジエグニーが岩の頂に立つ私達の姿を見つけて醜悪な笑みを浮かべ、互いの目が合う最中に一陣の風が吹く。

ほんの僅かの間だけ静寂な時間が訪れ、静かなる怒りを眼下に見据えた冷酷な双眸に叩きつける。

「フツ、のこのこと姿を現して下さるとは探す手間が省けて都合がいい。ようやく観念したようですね」

「勘違いするな。ここで滅するのは貴様達の方だ！」

「ほう、えらく威勢がいいですね。その言葉、あとで後悔させてあげますよ。さあ、君達は何時まで突っ立ったままでいるのです！早くイスマリア皇女を生け捕って私の前に連れてきなさい。それとあの小娘も殺してはいけませんよ。私が血を吸い尽くして殺してさしあげるんですからね。フツ、フハハハーーーーッ！！」

これから極上の獲物にありつけると思ってたか、ジエグニーが舌なめずりをした後に下級妖魔と魔物達を嚇ける。

それに呼応して異形の物共が狂喜するかのようには咆哮し、我先にと言わんばかりに群れをなして迫ってきた。

怒涛の荒波の如く押し寄せてくる禍々しい者達を前にして、私と白銀に輝くミックは構うことなく天高く飛び跳ねる。

そこへ下級妖魔達が飛びつかんばかりに襲い掛かってきた。

「アムド武甲聖装！！」

ペンダントの細い鎖を千切って天にかざすと、輝いていた真紅のクリスタルが幾条もの閃光を放つ。

白銀に輝いたミックと真紅の閃光が絡み合って眩しいばかりに輝き、ミックと私が一つに重なっていく。

この輝きの前に、たとえ妖魔といえど近寄ることは出来ない。目を瞑って闇雲に触れようとした妖魔を次々に蒸発させてしまうからだ。

消滅から逃れたとしても弾き飛ばして近寄らせない。

退魔光の中では全身の傷が癒えていく私の衣服が透けて消え、ミツクの巨軀が姿を変えて全身を覆って光輝く鎧となっていく、長剣と化したペンダントから真紅のクリスタルが外れて胸元に収まる。

そして体内に力が漲って失った魔力までもが回復していくと、長い刀身に映し出された私の髪と瞳がエメラルドグリーンの色から鎧や剣と同じ神々しいまでの輝く色に染まっていた。

それは瞬きを^{まはた}するぐらいの僅かな時間であり、白銀の鎧が全身を覆っていく様を誰も見ることが出来なかっただろう。

この全身を覆う百虎の紋章が刻まれた鎧と聖剣こそが、聖騎士と認められし者だけが神々から与えられた大いなる力。

ランガーナ王国創世より四神と崇められる四聖獣の力が宿った“武甲聖装”と呼ばれる聖騎士としての本当の姿なのだ。

Thoroughly destroy apparition……。四神に名を連ねる百虎の聖騎士の名において、我、この世を闇に墮とさんとする者を討ち滅ぼさん！

一度は拒絶したこの力を、今ここで使うことに何ら躊躇いもない。意固地になつていた心を優しく包み込んでくれた姫君の想いに応えようとすする強い意志が、身体の奥底から力を溢れんばかりに漲らせてくれる。

白銀に輝くこの鋭い眼光で無慈悲な殺戮者達を見下ろし、百虎の紋章が刻まれた刀身の鍔が光った刹那に聖剣を一閃させた。

剣庄の刃が閃光となり、眼下に群がる邪悪な者達を容赦なく切り裂いていく。

その実体がない衝撃は乾いた大地に大きな亀裂を走らせ、周囲にいた妖魔と魔物達を怖気させた。

刀身を構えぬまま悠然と地に降り立ってゆっくりと歩を進ませる

と、波が引いていくように後退してゆく。

人を喰らう悪鬼といえど、恐怖という感情は持ち合わせていたようだ。

ただ、巨大な妖気を発する目の前の妖魔だけは他の妖魔達とは違い、私の気迫に気圧されることなく余裕の笑みを浮かべながら待ち構えている。

「ジエグニー、私に後悔させると言った言葉をそのまま返そう。この白銀に輝く刃は、決してお前達を逃しはしない！」

「フッフ、なるほど……それが貴女を聖騎士と言わしめる本当の姿ですか。では、見せてもらいましょうか。如何ほどの力があるのかをね」

射抜くように見据えた先にいる上級妖魔に断固たる意思を叩きつけ、切っ先が弧を描くように聖剣を構える。

しかし、このジエグニーという妖魔は臆するどころか、興味深そうに私を見ているだけで自分から手を出そうとしない。

群がる妖魔と魔物に目配りをする、軽やかに身を翻しながら後退していく。

離れた位置から傍観者に徹して私が再び疲弊するのを待つつもりだろうが、狡猾な妖魔の思い通りにさせるつもりはない。

五感を周囲に張り巡らし、その一挙手一投足を注意深く伺う。

この隙に乗じてイスマリア皇女を襲うつもりなのか、先程まで懐いていた妖魔達が殺気を漲らせて入れ替わるように間合いを詰めてくる。

そして不気味なまでの叫び声を発し、突如として視界を埋め尽くさんばかりに襲い掛かってきた。

魔を斬り裂く閃光！ ～ Lightning Sword ～

聖剣を一振りすることに閃光が走り、数多くの妖魔や魔物達を斬り裂いていく。

疾風の如き体裁たいざいばきに追い縋れる者などいない。

禍々しい魔物の群れを一刀の下に斬り払い、空から強襲してくる妖魔達を振り上げた刀身の刃が閃光となって斬り落とす。

大地を蹴って舞いながら魔力を開放させて忌むべき存在が飛び交う中を触れずして葬り去り、着地を狙って取り囲んで迫る邪悪な者達を薙ぎ倒して突き進む。

白銀の鎧に傷一つ負わずともなく聖剣を構える私の周りに立ち塞がれる存在はいない。

駆け抜けた大地に魂の抜け殻となった醜い屍だけが四散していく。足を止めても鋭い眼光でひと睨みすれば、妖魔達は怖気づいて近寄ろうとしない。

この聖なる刃の前では知性を持たぬ魔物ですら慄いて後ずさり、本来の凶暴なまでの残忍さが鳴りを潜めている。

剣気と魔力を合わせた結界が全身を守るように包み、一步踏み出した先にある妖魔と魔物の屍が触れると蒸発して消えていく。

本来の聖騎士の姿となった今、もはや群れをなした下級妖魔や魔物など敵ではなかった。

「させるかつ！」

横一線に薙いだ刀身から繰り出した閃光がジエグニーの足を止める。

自分の配下の者共を相手にしている隙に乗じてイスマリア皇女を奪い取るうとしたのだろうが、鋭く研ぎ澄まされた神経はその姿を捉えずとも、気配を消した動きを決して見逃さない。

はないというわけですね」

「私など、まだまだ未熟……。だからこそ、その未熟な心が大切な兵達なかまを死なせてしまった。見殺しにしてしまったとは言え、皆の仇かたきは討たせてもらおう。無論、イスマリア様には指1本も触れさせはしない。お前とはここで決着をつける、いくぞ！」

怒れる戦神と化した今、巨大な妖気を放つ者に脅威を感じない。散っていった仲間達と守るべき人の為に、聖剣を構え直して再び大地を蹴って駆ける。

その先に生き残った下級の妖魔達が刺し違えんばかりに襲い掛かってこようが、刀身を振るえばいとも簡単に斬り裂いてゆく。

血走った形相で襲い掛かってくる者達は、もはや狩る者と狩られる者の立場が入れ替わっているのを分かっている。いない。

背後から群がって不意を突こうとしても、自らが放つ妖気で動きを教えてくれる。

ただ感じるまま刀身を振るうだけだった。

振り向き様に切っ先で弧を描きながら薙いだ一閃がそれを物語るように、妖魔達の首や胴を両断していく。

もはや残す敵は目の前にいる下級の妖魔と背後にいる上級妖魔のみ。

ならばここで一気に畳みかけようと思いを固めて呪文を唱えはじめた。

「火の精霊よ、マウアーシャナ日輪の神による浄化の刃を召喚し、我が力となって敵を討ち果たせ！」

詠唱が終わった刹那、刀身に炎が巻きついて燃え盛る。

爆炎の炎を宿したその聖剣を強く握り締めて天高く舞い、慄いて動けない妖魔達に振り下ろす。

紅利火羅劍
「フレア・ソード!!」

幾重に重なった炎の渦が火竜の如き姿となって切っ先から放たれ、凍てついた形相の妖魔達に襲い掛かる。

まるで意思を持ったかのようにうねり、炎に包まれた妖魔達を焼き尽くすと巨大な妖気を纏いし者にまで牙を剥く。

「こんなもので、私を他の屑達と一緒にしないで頂きたい!」

火竜の牙を受け止めて消し去ったのは、さすがに上級妖魔と称されるだけのことはある。

魔法剣を放って動きが止まったこちらの隙を突き、禍々しい形状をした刀身を抜いて黒い閃光を放ってきた。

灰になった屍の跡に燃え広がる紅蓮の炎の壁を飛び越えて黒い刃から逃れなければ、今頃は身に纏った鎧ごと斬られていたかもしれない。

揺らめきながら高くそびえる爆炎を一瞬で消し去った剣圧からして、その破壊力が窺い知れよう。

だが、このまま続け様に放たれる魔の閃光から逃げ回るつもりなど毛頭ない。

イスマリア皇女を奪い去ろうと辺りを探すジエグニーとの間合いを詰めて眼前に立ちはだかり、斬撃を繰り出して足を止める。

たとえ不浄なる者共を焼き尽くす業火を凌いだとしても、百虎の紋章が刻まれたこの聖剣は邪悪なる者が滅び去るまで追い続けるだろう。

「イスマリア様には指一本触れさせないと言った筈だ、お前に渡すはしない!」

「ならば貴女を先に殺すまで！」

「死んでも渡さん！」

聖と邪の刀身同士が反発しあつて金属の音が幾度もなく鳴り響く。拮抗する力が押し合い、互いの意地がぶつかつて一步も退けない状況が長く感じてしまう。

目の前のジエグニーという上級妖魔を一刻も早く倒さねばならない。

岩陰に寝かせたままのイスマリア皇女の容態が気になり、彼女に万が一の事があつてはならないと心が急^せかしてくる。

それはカイン王子やランガーナ王国とアステルベルク皇国の両国の為だけではない。

イスマリア皇女はご自分を危険な目に合わせてしまった私の愚かな行動を一切責めもせず、それどころかご自身の身体に負担が掛かるのを省みることもなく助けてくれた。

そして幼き頃から大切にしていた想いまでも温かく汲み取つてくださつたのだ。

この心優しき姫君の想いに応えねばならない。

ただ純粹に守りたいという一心が駆け巡つて私を突き動かす。

「そんなにご自分の命よりも、イスマリア皇女の方が大事なのですか？ それともご自身の名声に傷が付いてしまうのが怖いとでも？

どちらにせよ、私にはまったく理解し難いですがね」

「下衆なお前に人の心は分かるまい。一つの想いが時には大きな力を与えてくれるのを！」

「フツ、戯言をよくも恥ずかしげもなく言えますね。これから死にゆく貴女が哀れに見えますよ」

「黙れ！ イスマリア様は私の心まで救ってくださった。そして、その想いが私をより一層強くしてくれている。今戦っているのは私一人だけではない。イスマリア様の想いも一緒に戦っているのだ！ この二つの想いが合わさった力を……それを、その身をもって思い知れいっ！」

「小賢しい、クソ生意気な小娘がいい気になりよって！ この私をそう簡単に倒せると思ってかつ！ 貴様のような小娘に、この私が負ける筈がないわ！！ ただでは殺さん、その美しい肉体をじつくりと無残なまでに斬り刻んでやる。それとも血を一滴も残さずに啜り、骨と皮膚かわとなった骸を魔物達の餌にしてやるうか。どちらにせよ、貴様には無様な死に方だけが待っている。私に舐めた口の利き方をしたことを、あとでたっぷりと悔やむがいい！！」

憎しみに包まれた鋭い眼光で私を睨むジエグニーがついに本性を現し、互いに激しいまでの斬激を浴びせあう最中に間合いをとって不気味な笑みを浮かべている。

おそらく何かを仕掛けてくるつもりなのだろう。
ならばこちらから動かず、神経をより研ぎ澄まして待ち構えるのみ。

如何なる斬撃や妖気を放とうとも、後の先こせんを取って必殺の一撃を繰り出すだけだ。

「死ねえー！ーい！！！」

ジエグニーが叫ぶと紅いマントを靡せながら浮き上がり、姿を消したと思つた矢先に眼前に現れて刃を振り下ろしてくる。

その目にもとまらぬ一連の動きを、私には手に取るようにその一挙手一投足がはっきりと見えた。

この身を斬り裂こうとする禍々しい形状の刀身を聖なる刃で受け流しつつ柄を握る手を返し、刀身を跳ね上げて逆袈裟に斬りつける。

「な、なにっ!?!」

眼をかつぴらいて驚くジエグニーの剣を弾き飛ばすと弧を描いて大地に突き刺さる。

同時に私の聖剣は動きの止まったジエグニーを脇腹から肩口までを斬り裂いていた。

致命傷こそ避けたのは、さすがは上級妖魔といったところだろうか。

だが血飛沫を噴き出す傷口からどす黒い血が溢れ、深いダメージを負わせたことには間違いない。

「言った筈だ、想いが私を強くしてくれていると。もはやお前に残された道は唯一つ、暗い闇の世界へ還るしか……ないっ!!」

剣を失ったジエグニーが私の気迫に怯み、気後れして一歩づつ後退していく。

さしもの上級妖魔といっても恐怖を感じたのだろうか。

自慢の妖術が通じず、剣の勝負でも負けたのだから退かなければ己の死は免れないと自覚したのかもしれない。

ただ、次の一撃を繰り出せばこの勝敗が決するのだけは確かだと言えよう。

「いくら聖騎士が相手だったとはいえ、イスマリア皇女を連れ帰らず、ましてこのような小娘一人に負けたとあってはルキフェール様に顔向けが出来ん! フ、フフ、フフフ……こうなれば奥の手を使っしかない」

「やってみせる。だが、お前の死が覆ることはない」

慄く相手に向かって刃を突き出しながらゆっくりと一歩づつ歩を進めるとやがて間合いが詰まり、切っ先がジエグニーの喉元に触れた。

ところが血に染まった妖魔は脂汗を流しながらも、引き攣った表情の中に下卑た笑みを浮かべて視線を逸らそうとしない。

この期に及んで何がある!?

危険が迫っていると本能が告げてくる。

ならばこの切っ先を突き刺して最後の一撃を加えるのみと聖剣を強く握り締めたその時。

ジエグニーの声が聞き覚えのある声が変わっていく。

ずっと幼少の頃から聞き慣れた想い人の声に、そして姿も虚ろになつて変わっていった。

あと切っ先を目の前の妖魔に突き刺すだけで終わるのに、手が震え出して思うように動いてくれない。

心を激しく揺らされてしまい、思考が止まっていくように感じてしまう。

「これで私を倒すことは出来ない。そうだろう、リアナ……」

「カ、カイン様……!?!」

均整のとれた顔立ちにしなやかな金色の髪。

見間違ふことないその姿はカイン王子そのもの。

想い人の姿を目の前にして肩の力が抜けてしまい、思わず聖剣を引いてしまった。

「僕にそんな物騒な物を向けなくてくれ。それとも君は僕を殺そうとでも思っているのかい?」

仕草や穏やかな口調まで同じだ。

まるで本物のカイン王子が目の前に現れた錯覚に陥ってしまう。

「君に僕を殺せはしない。だってそうだろう、リアナは僕のことを好きなんだから……」

優しい笑みを浮かべたカイン王子が聖剣を握る私の手に触れてきた。

そのまま見つめられながら顔を寄せられていくだけで身体が思うように動けない。

頭では理解していても、心が想い人の姿に吸い寄せられていく。

ああ、惑わされちゃダメ！ 目の前にいるのはカイン様じゃない、これは妖魔が化した偽りの姿なのよ！

カイン王子のことを諦めようとしても想い慕う心が揺さぶられていく。

妖魔が化した姿と分かっているながら刀身を下げたまま突き刺すことが出来ない。

頬を撫でられていると全身の力が抜けていき、弱々しく握っていた聖剣が手からこぼれ落ちていく。

乾いた土に突き刺さった聖なる刃を掴もうと意識しても、理性より感情が上回って拒む。

偽りの姿の胸に顔を埋めてしまい、跳ね除けようとする意思が削がれ、気がつけば両手を冷たい背中に回していた。

「カイン……さま……わ、たし……」

「そう、それでいい……。その褒美を取らせてあげるよ。さあ、力をもっと抜いて。この僕自ら、君を今から楽にしてあげるからね。

苦痛はないよ。血を吸われる快楽を感じながら深い眠りに落ちてい

くだけだから。そう、二度と目覚めぬ永遠の眠りの中に……」

見上げるとカイン王子の姿をしたジェグニーの眼が怪しげに光り、大きく開かれた口の中から鋭い牙が見える。

あの優しい顔立ちだったカイン王子の表情が冷酷なものに変わっていくのに、身体が金縛りにあつたかのように指1本すら動かすことが出来ない。

心が蕩けていくように感じてしまう。

目の前で大きく開かれた口から覗く2本の鋭い牙が首筋へ触れ、痛みより心地よさを感じていたその時。

『そこまでです!! その方を傷つけるのは、この私が許わたくししません』

イスマリア皇女の声が頭の中に響いてきた。

それはジェグニーにも届いていたのか、突然なまでに苦しみ出すと元の姿に戻って私から離れていく。

「イ、イスマリア……さま……!?!」

支えを失って片膝をついた途端、指1本すら動かせなかった身体に自由が戻りはじめ、二つの小さな傷口をまだ思うように力が入りきらない手で押さえているうちに、失った本来の力が漲るように蘇ってくる。

大地に突き刺さっていた聖剣を支えにゆっくりと立ち上がって振り向くと、魔力とは違う優しく温かな光に包まれた何か近づいてきた。

「その妖魔はカイン王子の姿に成りすましましたではなく、リアナ様の心の中までも覗いていたのです。そして貴女に触れた時に身体

の自由までも……奪って……いた、の……です。で、ですが……こ、
これで術は……もう、解け、た……で、しょう……」

今にも倒れそうな弱々しい足取りで、イスマリア皇女が苦しげな
表情で私を見ている。

彼女が近寄ってきた気配にまったく気がつかなかった。

ジエグニーもまた私から血を啜って妖気を高めようとすることに
躍起となっていた為なのか、本来の獲物であった筈のイスマリア皇
女が姿を現したことに気がつかなかったようだ。

「ぐうああーっ！ あと少し、あと少しだったものをっ！」

「イスマリア様！」

法力によって術を封じられて苦しみ藻掻くジエグニーにとめを
刺さず、崩れ落ちるように倒れていくイスマリア皇女の姿が目に入
って思わず駆け出していた。

うつ伏せに倒れた彼女の傍に駆け寄ると聖剣を足元に置いて抱き
かかえる。

「イスマリア様、イスマリア様あつ！」

私の呼び掛けに薄っすらと微笑むお姿は、先程よりも顔色が青白
くなって衰弱具合が酷くなっている。

震えて微かに動く唇は何かを訴えようとし、弱々しく私の手を掴
もうとしてくる。

声にならない小さな吐息が乱れ、呼吸すらままならない様子から
して命の灯火が今にも消えそうに思えてならない。

「何も仰らないで下さい、お身体に障りますから」

懸命に差し出された震える手を握り締め、それ以上のことが何も
言えなかった。

私なんかを助けるために……。
声にならない震えた声で呟いていた。

イスマリア皇女はご自分の命を削ってまで法力を使い果たしたの
ではないかと思えてならない。

可憐で美しい顔立ちが見る影もないぐらいに頬が痩せ簿そり、目
の下の隈がより黒ずんでいるお姿からして、強大な妖気を封じ込む
為に無理をなさったのではないかと胸が痛む。

「ここでもうしばらく待っていて下さい。すぐに戻りますからね」

イスマリア皇女をその場に寝かすと、色白いその手にもう一度触
れた。

少し冷たくなった彼女の手から慈愛に満ちた優しさを感じる。

それが私に更なる強い力を与えてくれるように思えてならない。

足元に置いた聖剣を握り締めて立ち上がると力が漲ってくるよう
だ。

苦しみから解放されたジエグニーがイスマリア皇女が傍にいるに
も関わらず、再び禍々しいまでの黒く巨大な光の玉を放ってくる。

もはや冷静な判断が出来なくなっているのだろう。

だが、そんなものは今更私に通じるものではない。

刀身で軽く払うだけで打ち返し、ジエグニーの真横をすり抜ける
と弾けて拡散していく光景が遠くから迫ってくる。

咄嗟に身を挺して爆数からイスマリア皇女を守り、もう一度立ち
上がって砂塵が舞う中を見据えると驚愕の表情を浮かべるジエグニ
ーの姿があった。

「人の心を弄ぶ貴様だけは……貴様だけはっ！！」

激しく怒りが燃え上がり、ジエグニーに向かって駆ける。

今度は禍々しい刀身から黒い刃を放つてこようが、そんなもので疾風怒濤の刃と化した私を止められるものではない。

黒い閃光を薙ぎ払って憎むべき妖魔に迫りながら刀身を少し引き気味に構え、そこから蓄えた力を一気に解放させる。

そして切っ先が煌めくと斬撃が幾条もの閃光となって走り、ジエグニーの全身を無数の刃が襲って切り刻む。

「奥義、百華乱舞の陣！」

驚愕の表情に凍てついた上級妖魔の傍を駆け抜けた後に吹き上がった土煙の中、繰り出した剣撃の勢いを踏ん張って止まり、前屈みの姿勢を正しながら振り返って聖剣を構え直す。

衰えを知らぬ鋭い眼光で見据えた先に、斬撃に遅れて生じた衝撃がジエグニーを弾き飛ばしている光景が目に入ってくる。

地に伏して倒れていたジエグニーが全身からどす黒い血を噴き流してよろめきながら起き上がってくるもの、頭部の夥しい出血具合からして致命傷は確実に与えた筈だ。

無数の斬り口から噴き出す血にまみれ、もはや戦う力は残っていないように見えても、最後のあがきとばかりにふらつきながら立ち上がってくる姿に執念すら感じてしまう。

いや、苦渋と憎しみが籠った双眸で睨みつけてくる形相は怨念の塊だと言えるのかもしれない。

「これで終わりだ！」

とどめの一撃を加えんばかりに振り上げた刀身の前から血まみれの妖魔が消えた。

見上げると瞬く間に空へと逃れてこの場から立ち去ろうとしてい

る姿が見える。

「ク、ククク……お、お前達人間とは違って、私はこの程度では死なん。傷が癒えたら、真つ先に貴様を……殺して……やる。か、必ずな！」

ジエグニーが言ったことが本当なら、致命傷と思われる傷であっても回復してしまうのだろう。

ならば今ここで奴を仕留めなければ、またイスマリア皇女を奪おうと必ず現れる。

それを物語るようにジエグニーは下卑た笑みを見せて遠ざかってゆく。

如何なる一撃を加えようにも天と地と離れたこの位置からでは何も出来ないと思っっているのであるが、憎き存在をこのまま逃がすつもりはない。

散っていった者達の恨みを晴らすために……

イスマリア皇女の想いに応え、その御身を守るために……

そして幼き頃から大切にしていた想いを踏み躪られた怒りを叩き込むために……

妖魔ジエグニーだけは己の全てを賭してでも倒さなければならぬ！

その為にも百虎の聖騎士としての力を今、全て解き放つ！

様々な想いが駆け巡る中、聖なる鎧が百虎の咆哮を上げた。

聖剣の切っ先を震える大地に突き刺し、両手を合わせながら怒れ

る心を鎮めつつ念を込め、指を複雑に絡まして“印”を結びはじめると全身が白銀に光り輝く。

「夢想心眼・天魔滅却……臨・兵・闘・者・皆・陳・列・在・前……西方の守護神の名において、百虎が生み出させし破邪の牙よ、闇を切り裂く光の刃となれ！」

印を結び終えて聖剣を右手で掴み様に高々と天へかざすと同時に、鎧の背の部分から白銀に輝く翼が生えてくるのが実感できる。

足元から砂塵が吹き荒れているのを気にも留めず、刀身を振り降ろし様に両膝を折り曲げて力強く飛んだ。

百虎の翼を羽ばたかせながら天高く空を駆け上がり、神々しいまでに輝く翼を大きく広げて上昇を止めると光の羽が周囲に舞い散っていく。

遙か遠くのジエグニーを正面に捉えた時に全身から発する光が聖剣に集まり、光となった刀身を振り上げると天高くそびえたつ。

「ハアアアアアアー……ッ！ 斬っ……！」

己の全てを賭けて振り下ろす最後の一刀。

巨大な光の刃がしなりを帯び、遠く離れた上空で逃れようとしていた憎き妖魔に迫る。

そして恐怖に慄くあまりに動きを止めたのであろうジエグニーを、天までも覆い尽くさんばかりの閃光が押し潰していくように斬り裂き、白銀の輝きが飲み込んで塵一つ残さずに消滅させていく。

揺らめく光の羽が舞い落ちる中、妖魔の最期を見届けながら地上に片膝をついて降り立つ。

「妖魔……覆滅……！」

立ち上がった時には巨大な光の刀身と翼は既に消え、聖剣の刃に燻っている光の粒を振り払うと霧のように消えていった。

周囲にはもう邪悪なる気配が感じられない。

立っている場所から周囲を見渡せば、無数に散らばった屍だけが広がっている。

ようやく妖魔達の追撃の芽を絶ったことに安堵を感じても、それ以上に言い知れぬ不安が急に過ぎ^よって膨らんでいく。

イスマリア皇女の手を触ったときに感じた少しばかりの冷たさが、今になって何か嫌なことが起こる前触れではないのかと感じてしま
い、踵を返すとそのまま無我夢中に駆け出していた。

消えゆく命の尊厳 　　Dignity

無数の屍が広がる荒野の中をミックと共に無我夢中で走った先には、イスマリア皇女が寝かしたままの格好で今も動けずに横たわっていた。

瞼をかたく閉ざして眉間に深い皺を寄せ、震える唇は潤いを失って乾き、痩せ細った頬や目の下の隈が先程よりも更に酷くなっている。

あの可憐なまでの美しい姫君が、ここまで無残な姿に成り果ててしまっているのがあまりにも不憫に感じてならない。

ミックが慌てながら治癒魔法で治療をはじめたのと同時に声を掛けて容態を確かめてみると、声は発せずとも意識はあった。

しかし呼吸が激しく乱れた息遣いが只事ではないことを物語っている。

抱き起こして握り締めた細くしなやかな手から温もりが失われつつあり、衰弱の進行具合が命に関わる深刻な状態にまで酷くなっているように感じてしまう。

長い歴史を誇るアステルベルク皇家の血筋の中でも類稀な法力の持ち主であると言われるイスマリア皇女が、ここまで自分自身を酷使してしまわなければ法力を扱うことが出来ないのだろうか。

武甲聖装とは違った聖なる力についての詳しい知識がないとしても、まるで命を吸い取らんばかりに術者が掛かる負担が尋常ではなく、これには疑問を感じずにはいられない。

苦しまれる姫君を抱いたまま見つめていると、法力を使ったことによる一時的な現象であると信じたいのに嫌な予感を拭うことができず、今はただ祈るばかりだ。

「ち、ちょっと……ちか、ら、を……使い……すぎ、ま、した……わ……。いつも、こんな……疲れ……たり……し、しな……いの……」

……に……」

息が乱れて苦しげなイスマリア皇女が瞼をゆっくりと開き、私の無事な姿を見て安堵の笑みを浮かべる。

傍にいるミックが治療を続けても、まだ衰弱症状の進行が治まる様子が一向に現れない。

ますます酷くなるばかりで苦しまれるお姿が痛々しく感じてしま
う。

ずっと見つめる眼差しを前にして言葉が何も浮かばない。

早く元気なお姿に戻られることを祈りつつ、黙って見守るしかなかった。

「で、でも……リアナ様が……ぶ、無事で、なにより……です……
わ……」

本当は息苦しくて呼吸すら満足にできない筈なのにイスマリア皇女は微笑みを絶やさず、私の目を見つめたまま途切れ途切れになつた言葉を重ねる。

自分は大丈夫だと仰りたいのであろうが、その瞳から生気が失われいくような気がしてしまう。

ミックが悲痛な形相で治療を施しているのだから尚更だ。

「こ、これで……カイン、お、王子、に……こく、は、く……が……
……でき、ます……ね……」

やはりイスマリア皇女は何もかもお見通しだったようだ。

心の中でいろんな感情が複雑に絡まり、何を言っているのか分からない。

熱いものが込み上げてくる。

「わたくし……王子、に……」

「もういいんです！ もういいですから、喋らないで下さい……！」

健気なまでに思ったことを伝えようとされるお姿に、大粒の涙を堪えることが出来ない。

ミツクの治癒魔法が効いてくれるのをひたすら願い、心優しき姫君が助かって欲しいと神に縋るしかなかった。

「ちょ、直接……お、お断り……する、つもり……でし、た……の……」

途切れ途切れに聞こえる言葉に我が耳を疑った。

イスマリア皇女の手を握り締めた私の手に、このお方はご自分の意思を告げようと弱々しくもう一方の手を重ねてくる。

そ、それって、どういうこと……？

そんな事が出来る筈もない。

これはランガーナとアステルベルク両王家の掟によって決められたことだ。

有史以来の長きにわたる血の交わりを絶つことなどあってはならないのに、このお方は何故掟に背くというのだろうか。

「あ、あなた……リア、ナさ、ま……の……おこ、ころに……ふ、ふれて……決めまし、たの……」

「そんな、私なんかの為に……。私はカイン王子のことで貴女に嫉妬するような女なんですよ！ 貴女を危険な目に合わせてしまったし、兵達を見殺しにしまった私なんかをどうして……！」

私の想いを叶えんが為に法力を使って痛々しいまでのお姿になっ

てしまわれたのが耐えられない。

その為に血の掟に背かれようとなさっているイスマリア皇女の思
いやる気持ちが胸を深く抉ってくる。

思わず本音が出てしまった。

いや、この優しすぎる姫君に心を偽れない。

胸の内をすべて晒し、己を責めて叫けなければ心が壊れてしまい
そうになる。

「ウフ、ウフフ……何もかも、分かって……いましたわ。ご自分の
こと……責めては、だめ……。お気持ち……わか、り……ますから
……」

「イスマリア……さま……」

「私^{わたくし}には……ナスターシャしか……お、お友達……い、いなかっ
た。だから……リアナ……さま、と……お友達に……。あ、貴女と
……もつと……う、うう……」

目尻から涙を流して微笑むイスマリア皇女の言葉に自分が如何に
愚かだったと思ひ知らされる。

昨夜私に向けた笑みはそれなのだ。

このお方はあまりにも純粹で優しすぎる。

純粹すぎるが故に私の心の奥底まで見えてしまい、優しすぎるが
故に想いを叶えようとしてくれた。

そしてご自分が望むたった一つの願いを叶えたいばかりに、この
愚かな私を救おうとしたのではないだろうか。

「ミツク、なんとかならないの!? お願い、このままじゃイスマ
リア様が! ねえ、なんとかして、このままじゃ死んじゃうじゃな
い! お願いだからイスマリア様を助けて……助けてよおー!」

っ！！」

掛け続けた治癒魔法が全く効力をもたらさず、もう助からないとばかりにミツクが悲しみと悔しさを滲ませた表情で首を横に振る。

治癒魔法を身につけていない自分自身が何も出来ず、ただ泣きじやくって取り乱し、涙を流すだけなのが歯がゆくて堪らない。

その間にもイスマリア皇女の手が冷たくなっていく。

まるで残された命の灯火がゆっくりと消えていくように感じてしまっ。

「も、もう、いいのです……。わた、くし……。は……。もう……。だから……。リア……。ナ……。あ……。た……。くし……。の………」

「イ、イスマリア様……。イスマリア様あっ！ 目を開けて下さい、お願いだから……。お願いだから目を開けて……。起きてよ！ いや、死んじやいや、死んじやいや、死んじやいやあぁーっ！！！！うわぁあぁあぁーっ！！！！」

何もできない無力なこの腕の中で、イスマリア皇女は微笑んだまま静かに潤んだ瞳を閉じて息を引き取られた。

このお方は事切れる前に何を言おうとしていたのだろう。

痩せ細った頬に流れおちる涙は、いったい何を伝えたかったのだろうか。

そよぐ風がイスマリア皇女の髪を靡かせて冷たくなった顔に吹きかかる。

戦場となった数多くの屍が横たわる大地に、私の絶叫だけが虚しく響き渡っていた。

「う、うう……ご、ごめ……なさい……ごめん、なさい……イスマ
リア、さ、ま……。わ、私……私が……イ、イスマリア様を……ご、
殺したような、ものだ……。と、とり……かえしの……う、うう……
……つ、つかない、こと……を……わ、私は……私が……う、うう……
……イスマリア様ああ……イスマリア様ああー……あつー！」

冷たくなつたイスマリア皇女の亡骸を抱きしめて泣き叫んだ。
とめどもなく涙が溢れて止まらない。

優しく微笑んだ表情が、今もただ眠っているだけのようだ。

苦しみから解き放たれて安らいだお顔が私の心を居た堪れなくし
てしまい、胸を更に締め付けてくる。

妖魔の術に掛かったりしなければ守れた筈なのに……。たった
一人だけでも守れないのなら、こんな力なんてもういらぬ。私さ
え、私さえもつとしっかりしていれば！

どんなに後悔しても、この純粹なまでの心優しき姫君が瞼を開く
ことはもう二度とない。

すべて私が悪いのだ。

これは醜い嫉妬に駆られただけではなく、自分の感情を抑え切れ
なかつた事が招いた結果。

ただそれだけだった。

悲しみと自分への怒り、それが心の中で渦巻いていく。

己の不甲斐なさを呪い、感情に流されてしまう自分自身を責めた
てるしかなかった。

「リアナよ、いつまで取り乱しておる。立て、行くぞ」

背後から呼び掛けてくる声にイスマリア皇女の亡骸を抱いたまま振り向くと、全身が傷だらけの父ファンヴェルが何事もなかったかのように見下ろしている。

違う道のりで同時刻にアステルベルクを発った父に、いったい何があったというのだろうか。

「お、お父様……。わ、私……。私、イスマリア様を、守れなかった……私の所為で……。私が……」

取り返しがつかない結果を招いて嘆き悲しむあまりに、父に許しを請う自分自身が情けなく感じてしまう。

辛い現実を忘れられるのなら、腰に携えたその剣で斬り捨てられたい。

この罪をこのまま背負っていくには辛すぎる。

何か罰を受けなければ、とてもではないが心が耐えられそうにもなく、ただ父を見上げているだけで言葉が続かない。

「ああ、よくやった。それはイスマリア皇女ではない。本物のイスマリア皇女は今もご健在で我々が来るのを待っており。こんな場所に長居は無用だ。さあ、行くぞ」

父は何を言っているのだろう。

イスマリア皇女が死んだというのに、言っている言葉の意味が分からない。

それともただ聞き間違えただけなのだろうか。

イスマリア皇女が生きているって、どづいこと!?

この人は本物のイスマリア皇女じゃないの!?

だったらこの人は誰!?

お父様は何をしに来たの!?

麻痺した思考を強引なまでに働かせようとして、ようやく父が目の前に現れた疑問を感じた。

しかし父が本物のイスマリア皇女を護衛していたのなら、こんな場所に現れるのはあまりにも不自然すぎる。

私の前にたった一人で訪れる意味がなく、まして護衛の任務を放棄するなどあつてはならない。

衣服が所々破れて血まみれの姿が何かと戦ったことを物語っているだけに新たな疑問が沸いてくる。

いつも一緒にいる筈の神聖獣の姿が見当たらないのはどうしてだろう。

本物のイスマリア皇女と思われる人物は今、何処にいるのだろうか。

一つの疑問が浮かぶ度に別の疑問が浮かび上がってくる。

「では、お父様が一緒にお供していた方が本物の……? だったら何故!?!」

「我々が護衛したそれぞれのイスマリア皇女が、実は二人とも本物ではなかったというだけの話だ」

「そ、そんな……！！」

二人とも本物ではないのであれば、本物のイスマリア皇女はいったい何処にいるのだろうか。

アステルベルク城を出発の際に馬車は2台しかなかった。

まだ城から出ていないとでもいうのだろうか。

我々に彼女達が影姫だった事実を秘密にしてまで囿にした理由がまったく分からない。

目の前の現実を受け入れられない最中に叩きつけられたこの事実。

いったい我々がしてきたことは何だったのだろうか。

腕の中で眠るこの人はいったい誰なのだ？

どうして自分の命を懸けてまで私を守ろうとしてくれたのだろうか。

もはや何が真実で嘘なのか分からない。

この人の死を受け入れられないばかりに、これはすべて悪い夢であって欲しいという心からの願いを、父は事の真相を無表情のまま淡々と語って無残にも打ち砕いてくれた。

それは悲しみに包まれた心を奈落の底に叩き落とす衝撃的なまでの真相。

決して犯してはならない“人の尊厳”を踏み躪る行為を意味していた。

私達が護衛をしたのは本物のイスマリア皇女に仕えていた二人の侍女だったらしい。

彼女達はアステルベルク城出発前に魔法で記憶を消され、その後イスマリア皇女の記憶と人格を植えつけられたそうだ。

私が守ろうとしたこの人が本来ならアステルベルク皇家の血を受け継いでいなければ使えない筈の法力という力を扱えたのは、植えつけられた記憶と人格に原因があるらしい。

つまり極限の状況下で本物のイスマリア皇女ならするであろうという行動を植えつけられた人格通りに行動した結果、命を代償にして扱えたということになる。

もちろん本人達は命を削っているという自覚はなかっただろう。

だが、記憶と人格を植えつけられただけで法力を扱えるとは考え難いとも父は言った。

常にイスマリア皇女の傍を離れず、身の回りの世話をして法力という聖なる力に触れていたからこそ扱えたとしか考えられないらしい。

これは予期せぬ出来事だったと言っているが、果たして本当にそうなのか？

もう一人の侍女も自分がイスマリア皇女だと思い込まされて同じ末路を辿ったという事実が本当ならば、確かに筋は通っている。

しかし命を削れば彼女達が法力を扱えることを初めから知っていたからこそ、妖魔の襲撃に備えて影姫に選んだのではないかと思えてならない。

今回の護衛計画の立案から指揮までも父がすべて揮っていただけに、全て計算通りだったのではないかと疑っている。

偽りの姫を用意してまで妖魔の目を欺いている間に本物のイスマリア皇女をランガーナへお迎えするという計画を聞かされてしまえば当然だ。

まして影姫が本物であると真実味を持たせる為に記憶を弄つたのは紛れもない事実。

ただでさえこの許すまじ非人道的な行為を平然とやってのけたのだから、嘘を言っているとしか思えない。

「分かったのならもう行くぞ。いつまでそんなものを大事そうに抱

きかかえておる。さあ、早く立て！ 我ら親子は今度こそ本物のイスマリア皇女を守らなくてはならないのだからな」

「その前に何か言うことはありませんか？」

「ん、他に何かあるというのだ？ 結果的に生き残ったのは私とお前達だけだが、我々は十分に囀の役目を果たせたではないか。こんな下らぬ話をするだけでも時間が無駄になるのはお前にも分かる筈。この話はまた後だ、我々は急がねばならんのだからな」

本物のイスマリア皇女の護衛なんて今は関係ない。

そんな事よりも天に召されたこの人達に言う言葉が先にあると思う。

この人は自分がイスマリア皇女だと思い込まされ、そして自身自身を失ったまま私を守ろうとして死んだ。

ただ植えつけられた記憶と人格に従って、私の心まで助けようとして逝った。

こんな理不尽な死に様があつていいのか！

他人の記憶のまま、本当の自分が誰なのか知らずに死んでいい筈がない！！

一言も謝罪の言葉がなく、まして亡くなった人を物呼ばわりする父が許せず、堪えがたい怒りが沸々と込み上げてくる。

「お、お父様はイスマリア様を、この方を弔うこともなくこのまま捨て置けと仰るのですか！？ 死んだみんなを弔わないとでも仰るのですか！？」

「くだい！！ そんな時間は無いと言った筈だ！ それにリアナよ、それはイスマリア皇女ではない。そんなものと一緒にしては無礼ではないか、言葉を選べ！！」

なんて言い草なのだろうか。
死んだ人をまた物呼ばわりする目の前の人物が父だとは思えない。
まるで妖魔が偽った姿のように思えてしまう。

厳格で厳しい人には変わりないが、こんな言葉を吐く人ではなかった。

それがどうしてこんな非情な事をいとも簡単に言えるのだろうか。
私にとっての“イスマリア皇女”を強く抱きしめ、見上げた拍子に思わず父を睨みつけた。

「どうか行くのはこの方を弔わせてからにして下さい。それに死んでいった兵達も、このままでは死んでも死にきれないではありませんか！　お願いです、せめて土に還してあげる時間だけでも、私に下さい！」

散っていった者達へ、せめてもの慈悲を与えて欲しいと願って父に食い下がった。

ミックも同じ思いなのだろうか、ひと時も私の傍から離れようとしな。

影姫となって死んだこの人や兵達なかまの死を悲しみ、叩きつけられた非情なる言葉に従えないのだろう。

「犠牲になった侍女と彼等には感謝しているよ、囀の役目を十分に果たしてくれたのだからな。だが、弔ってやる時間はない」

「そ、そんな……あんまりですわ！　この人をこのまま置いていくなんて酷い、酷すぎます！」

「感情に流されおって、この愚か者め！　それこそ彼等の死を無駄にしてしまつとなぜ分からん！！　彼等をこのまま無駄死させるつ

もりなのか!？」

「でも遺体をそのままにするなんて、お父様には亡くなった人を弔う気持ちがないのですか!？ それで亡くなった人の尊厳はどうなるんです!」

「そんなもので人は救えん!　まして国を守ることなど出来るものか!」

「お父様っ!!」

これから本物のイスマリア皇女を護衛する為に急いで合流しなければならぬのは分かる。

だからと言って、私にはそこまで非情にはなりきれない。

言葉を持たない人形ではないのだ。

まして機械仕掛けのからくりでもない。

物事を単純に割り切れるのが本来の務めに殉ずることになるうとも、私は嫌だ。

血の通った人間ならば人としての情があつて当たり前であり、それこそが人としての正しい在り方ではないのか。

人としての感情があるからこそ、腕の中で永遠の眠りについたこの人を自分自身の手で弔つてあげたい。

私は自分の考え方が間違つていないと思う。

それこそが人として最後に残された尊厳を守ることではないのかと信じている。

ならば父は国を守る為になら人としての情愛だけではなく、すべて棄て去つたとしてもいいのか。

そんなの絶対に間違つてる!!

厳しくて怖い人であっても、今まで不器用なりに愛情を注いで育ててくれたことに感謝している。

好きで尊敬もしていた。

それが私の中から音を立てながら脆く崩れ去っていく。

「お前がそこまで愚かだとは思わなんだ。リアナよ、今のお前には聖騎士たる資格がない。ミツク、お前もだ！ それで神聖獣とは片腹痛いわ！ 揃いも揃ってもういい…… イスマリア皇女の処へは私一人で行く。お前達はそこで勝手に泣いておれ！ ならばせめてその者達を十分に弔ってやることだな」

無情なまでに言い放って立ち去る父の背を、私は何も言い返せず黙って見送った。

一瞬だけ悲しげな表情に見えたのは目の錯覚なのだろうか。

死んだ人達の尊厳を踏み躪らんばかりに非情に徹しきれぬ人が、最後になって見せるとは思えない優しさを含ませていたような気がする。

「イスマリア様…… あっ！？ ううん…… 姫様、そろそろ帰りましょうか」

この人は私にとって紛れもなき大切な姫君だからこそ、誰にも弔わせたくない。

父や今回の件に関わった者達の目に届かない静かな場所で安らかに眠らせてあげたかった。

せめて母国が見渡せる場所ならば寂しがることもないだろう。

「私、景色がとても綺麗で静かな場所を知っているんです。きっと気に入ってもらえますよ。そこで昨夜の話の続きでもしましょうか」

このお方から感じた想いは決して偽りでない。

言葉のすべてに優しさと純粹な気持ちを感じていた。

この無垢なる姫君が望まれた想いを心から受け止めたい。

それこそが“友”としてしてあげられる最大の手向けだと思う。

こんな事になるのなら、昨夜もつと話をしておけば良かったと悔やんでも悔やみきれない。

あれほど流しても枯れなかった涙が流れなくなり、悲しみだけが心に広がってゆく。

もう、すべて流し尽くしてしまったのだろうか。

泣きたくても泣けない私を優しく慰めてくれるかのように、腕の中で眠る大事な人が微笑んでくれている気がしてならない。

いや、確かに微笑んで下さっているのだ。

そしてこれからも永遠に微笑んでくれるだろう。

私がこの方にお仕えする限り……。

誓い（Vow）（エピローグ）

あの日から数日後、本物のイスマリア皇女は聖騎士デュランと父ファンヴェル達によって無事にランガーナ城へ到着した。

父の神聖獣はアステルベルク城を出立以前からイスマリア皇女の傍から片時も離れず、妖魔の襲撃を受けた際にはデュランが聖騎士として本来の力を十二分に発揮し、父と合流後は二人して万全な護衛体勢を築き上げたらしい。

カイン王子の妃となられるお方を襲撃してくる者達の目に触れさせることもなく、当初から予定された行程通りにお迎えすることができた。

こんな話を後から聞かされても私には関係ない。

それよりも死んでいった者達を弔おうとしなかった父に憤りを感じている。

まして影姫として囷となって死んだ二人の侍女は今も行方不明として扱われたばかりか、この事実を生涯語ることを禁じられた挙句、彼女達の名を口にすることすらも禁じられたのだから納得がいく筈もない。

この事実をランガーナ王国側で知っている者は私とミックを除けば、首謀者でありながら自ら囷役を買って出た父ファンヴェルと一部の重臣達に限られている。

国王やカイン王子にさえイスマリア皇女を出迎えるまで告げなかったこの行為、果たして誠の忠義と言えるのだろうか。

王族達がこの話を耳にしてどのように思われたのかは知らない。ただカイン王子だけは妃となられるお方にも言えない立場だった故に苦悩された筈。

私にはそれを確かめる勇気がなかった。

もしも一つだけ言えることがあるとするならば、ランガーナ王国とアステルベルク皇国の創生以来から続く血の交わりを守る為だっ

たとはいえ、影でこのような策謀を謀った父や重臣達を、この命尽き果てても決して許しはしないだろう。

本来ならば次期国王の妃とられるお方を無事にお迎えしたことは喜ばしいことなのかもしれない。

現に出迎えた人々はカイン王子が妃を迎えることを喜び、ランギーナ王国の更なる発展を誰もが信じて疑わない様子だった。

しかし、数多くの血が流されただけでなく、闇に葬られた侍女達のことを想うと私は素直に喜べない。

父と一緒に囹として影姫を演じさせられたもう一人の侍女の遺体が見つからなかったのだから尚更だ。

もしも救いがあるとするならば、後に発見された兵達の遺体だけでも墓地に埋葬されたこと。

そして守りきれなかった“私だけの姫君”を、アステルベルク皇国が一望できるこの場所に弔ってあげられたことぐらいだろうか。

たとえ名前を刻むことが出来なくても、目の前にある墓標はせめてもの手向けであり、私なりの友情と忠義の証。

此処ならば俗世の嫌なものを見ることもない。

眼下から故郷を見渡せ、誰にも邪魔をされることもなく静かに眠ることができるだろうと信じて……。

いや、信じているからこそ生前の可憐で美しい姿と声を感じることがができる。

「はい、イスマリア様も貴女とお会いしたと常々申されています。

ですから妖魔との戦いが終われば必ずお連れしますので、それまで待っていて下さい」

ここへ訪れれば、目の前の姫君は必ず微笑んでくれる。

私の言葉に耳を傾け、とびっきりの無邪気な笑顔も見せてくれるのだから……。

* * *

あの日から約1年後、新たな国王が誕生した。

新王カインの誕生に沸き立つランガーナ国内で、私だけはこの日を複雑な気持ちで向かえ、散っていった人達のこと偲びながら城に背を向けていた。

未だにカイン新王とお会いするのを自ら避けてるくに会話もしてないのは、彼のことをまだ諦めきれない気持ちが多量なりとも残っているのではないかと思う。

確かのはあの日以降から父を見る目が変わってしまった、自分の気持ちも僅かながらも徐々に変わっていくのを感じていることだけ。そして名前が刻まれていない小さな墓標の前で故人の在りし日の姿を思い出す度に、あの忌まわしい記憶が鮮明に蘇ってくる。

「あの日のことを思い出すのは、正直に言うとも今も辛いです。ですが、思い出さないように記憶を閉ざしてしまえば、貴女との出会いまでも忘れてしまうような気がしてなりません。だからしっかりと自分の心に刻みつけています。この記憶が生涯消えることはないでしょう。私は貴女と共に、この先も生きていくつもりなのですから

……」

永遠の別れまでがたった二日間の出会いであったとしても、この人は紛れもなき私だけの姫君。

たとえ植えつけられた偽りの人格であっても、生涯仕えるべき主君であり友人でもある。

それだけは偽りのない確かな真実。

心を素直に開いて話せる唯一無二の人でもあるのだから、悲しい別れでも出会えてよかったと思う。

せめて生前に一度だけでも本当の名で呼んであげたかった。

可憐で美しい美貌をそのまま表現した名前だからこそ、今もまだ悔やんでも悔やみきれない。

小さな墓標の中で静かに眠る姫君の本当の名前を知ったのは、婚礼の儀が執り行われるのを目前に迫った頃だった。

本物のイスマリア皇女との謁見が初めて許された日でもあったのだから、何か運命じみたものを感じてしまう。

お二人の外見がまったく似ていないのに、同じ口調と仕草には正直驚かされてしまった。

もしもイスマリア皇女が私の姫君と重なって見えなければ、重臣達が立ち並ぶ儼かな謁見の場で彼女の死を伝えることはなかったと思う。

おそらく訊ねられても心に秘めたまま今も話していない筈。

また、イスマリア皇女が周囲の者達すべてを謁見の場から外して二人つきりにしてくれたのは、決して語ってはいけない真実を口にした私に対しての心遣いだったのかもしれない。

公の場で口外した責任までも代わりにとると仰られても、道中に何があつたのか知りたいと申された時はさすがに躊躇ってしまった。

全てを語るにはアステルベルク城を出発してから今生の別れを迎えるまでのこと、そして私が幼き日からカイン様を慕っていたことまでも話さなければならぬ。

涙ながらにOKC跪つく姫君に真実を知る権利があるとは思っても、自分の心を裸にしてしまうのがとても辛かった。

何度も懇願して訊ねてくるお姿を前に事実をありのままに伝えたのは、手を差し伸べてくださった時に感じた温もりに、今は亡き人の面影を感じたからなのかもしれない。

そして、この複雑な胸の内までも察してくださったからこそ黙っていられなかった。

あの日の前夜に手を繋ぎながら肩を寄せ合った時の温もりと優しさを思い出しながら語るのに、涙を流さずに辛い気持ちを堪えることなど出来る筈もない。

「あの涙を見ればイスマリア様が心から仰られていた事がすぐに分かりましたし、お二人の強い絆を感じたんですもの。もしも貴女とお会いしていなければ、私達の関係が今とはまったく違ったものになっていたかもしれません。だから私達を繋いでくれた貴女の為に、私はイスマリア様をお守りする為ならいつだって命を賭けられます。だって貴女にだけではなく、私にまでもこれからは“お友達”になりましようって仰ってくれたんですもの」

故人が記憶をすべて失ってしまうのを承知で自ら望んで影姫になった真実をイスマリア皇女が教えてくださったのは、もしかすれば彼女を通じて私達の心が繋がったからだと思いたい。

仕える主であるのと同時に大切な友達を守りたかったというその気持ちを感じたからこそ痛いほどに分かる。

お二人は主従である前に親友でもあったのだ。

だからこそ心底嘆き悲しまれるイスマリア皇女のお姿を前にして、あの日の忌まわしい光景を思い出しながら語るのは胸を引き裂かれてしまうように感じた。

イスマリア皇女が泣き崩れるお姿を目の当たりまにしてしまえば、溢れ流れる涙を抑えることなど堪えようがない。

お顔を伏せたまま深い悲しみに包まれて嘆かれるお姿を、ただ黙って見つめているしかなかった。

* * *

「そうそう、今日はご報告もあつて来たんです。イスマリア様がご懐妊なされたんですよ。それで私が今度、王妃直属の親衛隊長に選ばれたんです。とは言っても、妖魔との戦いが終えてからの話なんですけどね。ウフフ、そんな不安そうなお顔をなさらないで下さい。もう二度と過ちは繰り返しません。私だって少しぐらいは成長しているんですから。それでちよつと思つたんです。もしイスマリア様のお腹の赤ちゃんが、男の子ではなく女の子なら……」

あの夜と同じように肩を寄せ合つて手を繋いで歩けるのであれば、イスマリア王妃のお腹の中にいる赤子が“私だけの姫君”の生まれ変わりであつて欲しいと願つた。

もしもその願いが叶うのなら、この人が最後に願つたもう一つの願いも叶えられるかもしれない。

二人がそれぞれに願つた願いが叶えられる日が訪れるならば、私はそこでようやく過去をふり返ることもなく、明日だけを見据えて歩むことが出来るだろう。

「その時はまたあの夜と同じように手を繋いで歩きましょう。いいですよ？　では、そろそろ行つてきます……」

雲一つない青空を見上げると、嬉しそうに微笑んだ姫君の姿が晴れ渡つた青空に浮かぶ。

この腕の中で懸命に伝えようとして　声にならなかつた“私わたくしの分まで生きて！”という言葉と共に……。

だから必ず生きて帰つてこよう

ナスターシャという名の姫君の想いと共に……

T H E
E N D

誓い ～ Vow ～ (エピローグ) (後書き)

この物語を書き始める際、年頃の女の子が底知れぬ力を秘めていながらも、いろんな事に思い悩みながら成長していくというコンセプトから始めました。

そこから今回のテーマを幾つか散りばめ、最終的に仕上がったのが今の形です。

本来ならサブエピソードとしてのプロットだったのが何故このようになってしまったのかと言えば、本筋を描く前にリアナがどういった心情で戦いに身を投じているのかを読んでもださる皆様方に感じて欲しかったという私の自己満足があったからなのかもしれませ

ん。

第2章からはエピローグにあつた回想を経て物語は進み、ナスターシャの死を乗り越えられぬリアナの生き様と、彼女に関わる者達が絡んでゆくことになるでしょう。

もちろん今回は出番が無かつた他の聖騎士やカイン王子が登場し、本物のイスマリア皇女も物語に深く関わってきます。

あとミック以外の神聖獣達も個性豊かの面々が揃っていますのでどうかお楽しみに。

これは余談になってしまいましたが、第2章以降の文章は三人称に変更となります。

今回だけ一人称にした理由は、先程に述べた通りです。

これこそ私の身勝手であり、また“独りよがりの真骨頂”ともいうべきものでしょうか。

さて、今回こちらへ投稿するにあたり加筆や修正を施してみたのですが、実際のところまだ満足に仕上がっていません。

主人公リアナの心情を重点に置いた結果、物語全体が間延びした

ように私自身が感じているからです。

その結果、このような文章になってしまいました。

文章を三人称にして幼少の頃から物語が順に進んでいく方法も考えましたが、リアナが冒頭で過去を振り返って現代に戻るというスタンスをどうしても変更したくなかったからであり、これこそ繰り返し申し上げますが“作者の独りよがり”というものなんではない。

ですからこれを今後の課題として、続編に活かしていきたいと思っています。

ただ某サイトで他の連載中の小説があり、この物語を某サイトでも以前に公開したのからこちらの仕様に変更する作業もありますので、第2章開始はしばらくお待ち下さい。

勝手な事で申し訳ありませんが、いずれ残した複線を徐々に紐解いてまいります。

約1年という月日を要して今の形になったこの物語が、一人でも何かを感じてくれたら作者冥利に尽きることでしよう。

拙い文章を最後まで読んで下さった方には心からお礼申し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5147s/>

リアナ ~ Holy Knight of the Grief ~

2011年10月8日23時25分発行